

平成27年度

# 「平和の語り部」 派遣事業感想文集



中野区

## はじめに

中野区は昭和五十七年八月に「憲法擁護・非核都市」の宣言を行いました。その後平成二年には、「中野区における平和行政の基本に関する条例」を施行し、条例に基づき平和の意義の普及など平和行政を推進するため様々な事業を積み重ねてきました。

今年度は戦後七十年を迎え、若い世代へ戦争の悲惨さや平和の意義を普及するため、区立中学校全十一校に「平和の語り部」の派遣を実施しました。全中学校に「語り部」の派遣を行うのは初めての試みでしたが、生徒は「語り部」の話に真剣に耳を傾け、活発に質問の出した学校もありました。生徒たちが、戦争の惨状を学び、現在の平和の有難さを改めて実感できる機会になったものと思います。今回は、各学校から三人の生徒に作文を提出していただき、このような形で文集にまとめました。

今回ご協力をいただいた「語り部」の方は、ほとんどが十代かそれ以下の年齢で戦争を経験されました。戦後七十年が経過した今でも、「語り部」の方は戦時中の出来事を鮮明に記憶されており、現在では想像することさえ難しいような当時の悲惨な状況について話をしていただきました。一方で、本人にとっては思い出すのも辛いことでも、七十年経ったからこそ話をしていただけることもありました。体験された内容は様々ですが、二度と戦争をしたくない、起こしてほしくない、という思いは共通のものであります。

今後は戦争体験者から直接体験談を聞くのは、益々難しくなりますが、今回話を聞いた生徒が「語り部」の皆さんの思いを受け止め、今度は、身近な人々に伝えていくことで、未来へ向けて戦争の惨禍を伝えられるよう願っています。また、この文集が多くの方にとって平和に対する思いを新たにすきつかけとなれば幸いです。

最後に、この冊子を発行するにあたりご協力いただいた「語り部」の皆様、学校関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

二〇一六（平成二十八）年二月

中野区政策室平和・国際化担当

## 目次

はじめに

本文集のあらまし・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

第一部 「平和の語り部」からのお話と生徒の作文・・・・・・・・・・ 5

「平和の語り部」派遣事業実施結果一覧・・・・・・・・・・ 6

### 第二中学校

命を分けた入隊通知 語り部 上島 昌之・・・・・・ 7

平和とは 三年 色平 野々花・・・・・・ 9

「平和の語り部」について 三年 大森 晃義・・・・・・ 10

平和の語り部 三年 宗野 かれん・・・・・・ 11

### 第三中学校

広島原爆投下後の様子 語り部 家島 昌志・・・・・・ 12

平和の語り部を聞いて 二年 川浪 彩奈・・・・・・ 14

語り部の話を聞いて 二年 御給 みのり・・・・・・ 15

平和の語り部を聞いて 二年 崎浜 海来・・・・・・ 16

### 第四中学校

群馬県安中市での訓導体験 語り部 土肥 幸子・・・・・・ 17

平和の語り部

戦争とは

食べ物の大事さ

一年 森田 ひいろ・・・・・・ 19

一年 山口 のぞみ・・・・・・ 20

一年 横山 萌佳・・・・・・ 21

### 第五中学校

広島原爆投下後の様子 語り部 野瀬 節子・・・・・・ 22

忘れてはいけない恐怖 三年 井戸田 颯・・・・・・ 25

戦後が未来へ続くように 三年 今井 八彩・・・・・・ 26

私たちがやらなければいけないこと 三年 須田 爽代・・・・・・ 27

### 第七中学校

広島原爆投下後の様子 語り部 鈴木 容子・・・・・・ 28

「平和の語り部」鈴木さんのお話を聞いて 一年 江尻 ひなの・・・・・・ 31

「平和の語り部」鈴木さんのお話を聞いて 一年 大平 知雅・・・・・・ 32

「平和の語り部」鈴木さんのお話を聞いて 一年 望月 結海・・・・・・ 32

### 第八中学校

広島原爆投下後の様子 語り部 森 正幸・・・・・・ 33

森さんのお話を聞いて 二年 佐藤 愛樺・・・・・・ 36

森さんのお話を聞いて 三年 本郷 太朗・・・・・・ 37

森さんのお話を聞いて 一年 宮崎 千波・・・・・・ 38

## 第十中学校

|              |     |        |    |
|--------------|-----|--------|----|
| せまりくる火からの逃避  | 語り部 | 伊谷 富美子 | 39 |
| 「語り部教室」を体験   | 一年  | 池野 龍紀  | 41 |
| 「語り部教室」を体験して | 一年  | 兼清 蓮   | 42 |
| 火が追ってくる      | 一年  | 佐藤 綺音  | 43 |

## 北中野中学校

|               |     |        |    |
|---------------|-----|--------|----|
| 広島原爆投下後の様子    | 語り部 | 森 正幸   | 44 |
| 戦争・原爆を無くすために  | 一年  | 大野 由莉子 | 47 |
| 被爆体験を聞いて      | 二年  | 佐藤 芙紀  | 48 |
| 被爆体験者の方の話を聞いて | 三年  | 塩崎 雄大  | 49 |

## 緑野中学校

|               |     |         |    |
|---------------|-----|---------|----|
| 広島原爆投下後の様子    | 語り部 | 鈴木 容子   | 51 |
| 心の傷           | 二年  | 越永 璃音   | 54 |
| 原爆から教えてもらったこと | 二年  | 佐々木 ひかる | 55 |
| 講演会の感想        | 二年  | 中園 史歩   | 56 |

## 南中野中学校

|                  |     |       |    |
|------------------|-----|-------|----|
| 広島原爆投下後の様子       | 語り部 | 鈴木 容子 | 57 |
| 「平和の語り部」からの話を聞いて | 二年  | 小林 彩夏 | 58 |
| 「平和の語り部」からの話を聞いて | 一年  | 高石 真行 | 59 |

## 「平和の語り部」からの話を聞いて

|    |       |    |
|----|-------|----|
| 二年 | 村山 美月 | 60 |
|----|-------|----|

## 中野中学校

|                  |     |       |    |
|------------------|-----|-------|----|
| 広島原爆投下後の様子       | 語り部 | 山田 玲子 | 62 |
| 学び、考え、伝えること      | 二年  | 石井 颯  | 65 |
| 「平和の語り部」からの話を聞いて | 三年  | 楠 ささら | 65 |

|             |    |      |    |
|-------------|----|------|----|
| 本当の戦争のおそろしさ | 一年 | 近藤 藍 | 66 |
|-------------|----|------|----|

## 第二部 参考資料

|                              |    |
|------------------------------|----|
| 一 平和パネル貸出のご案内                | 69 |
| 二 平和関連書籍等のご案内                | 73 |
| 三 憲法擁護・非核都市の宣言、平和行政の基本に関する条例 | 75 |

本文集のあらまし

ここでは、語り部の皆さんの戦争体験を内容ごとに分類し、お話の概要と生徒の感想文の抜粋をまとめました。本編の概要をご覧くださいだけです。

◆航空隊に入隊して（二校）

第二中学校

語り部の上島昌之さんは、飛行機のプロペラの生産をする会社で三年間勤務した後、滋賀県の八日市航空隊へ入隊しました。戦争が厳しくなり航空隊は疎開し、飛行機の組立工場で作業をするようになりましたが、部品不足のため、終戦まで一機も完成させることができませんでした。終戦まで直接戦闘に参加することはありませんでしたが、戦争は前線だけでなく、内地で戦争に協力していることも戦争だとお話をされました。

【生徒の感想文より】

・『あなたにとつての平和ってなんですか。』という質問に対して、『今、生きていることです。』という答えにびっくりしました。  
・『ぼくは平和とは戦争などの争いごとで苦しむ人達がいなくなるということだと思います。そして平和になるためには一人一人が平和について考えることが必要だと思いました。』

↓お話の詳細は7ページ、生徒の感想文は9ページから11ページを

ご覧ください。

◆国民学校での教員体験（二校）

第四中学校

語り部の土肥幸子さんは、戦時中、群馬県で国民学校の教員をしていました。食糧が不足していたため、子どもたちと一緒にイナゴ捕りをした体験をお話されました。当時は、イナゴが一番のたんぱく源でお米と同じ値段で売れるため、一生懸命イナゴ捕りをしたそうです。

【生徒の感想文より】

・「これからは、戦争がなくなり、世界が平和のために各国が協力し合っていくと同時に、何か小さな活動でも、平和につながるのなら、積極的に参加していくようにしたい。」  
・「私はこの話を聞いて、私が当たり前のように残っていたり好き嫌いを言ったりしているのが申しわけなくなりました。」

↓お話の詳細は17ページ、生徒の感想文は19ページから21ページを

ご覧ください。

## ◆中野での空襲体験（二校）

第十中学校

語り部の伊谷富美子さんは、昭和二十年三月十日、二十歳の時、荒川区で東京大空襲に遭いました。幸い直接被害は免れましたが、安全な場所を求め、同年五月二十四日、東中野に引越をしました。ところが、その翌日中野の空襲で自宅を焼失しました。土地勘のない中、火に追われ、後ろを見る余裕もなく走って逃げた経験をお話されました。

### 【生徒の感想文より】

・「逃げる事だけを考え、逃げ切って帰れば、何も無い。体験していない人の想像なんて、実際よりもずっと軽く考えてしまうはずなのに、それでも考えるとゾッとしてしまいます。」  
・「その場に立ちあわせることが無くてよかったと思う反面、結局今は平和なのかと疑問に思います。」

↓お話の詳細は39ページ、生徒の感想文は41ページから43ページをご覧ください。

## ◆広島での被爆体験（八校）

第三中学校

語り部の家島昌志さんは、三才の時に広島で被爆しました。昨年、被爆者代表として、NPT再検討会議を傍聴したり被爆証言活動をされましたが、核兵器廃絶への道は遠いと感じたこと、また、原爆投下のずっと後になり原爆症になった人が多くいることなど放射線の後に尾を引く恐ろしさについてお話をされました。

### 【生徒の感想文より】

・「被害にあったことは本当に悲しく、悔しいけれど、地域や近所の人たちと助け合い、協力して生活してきたという話を聞いて、一人では何もできないから協力することは大事だと思いました。」  
・「昔の悲しい体験談を話して下さった語り部の方にとっても感謝しています。そして今の私達の暮らしている環境がどれだけありがたいものなのかもよく実感できました。」

↓お話の詳細は12ページ、生徒の感想文は14ページから16ページをご覧ください。

第五中学校

語り部の野瀬節子さんは、女学校五年生の時に、学徒報国隊として劣悪な環境の中、戦闘機を造る工場で働いていました。同年代の男子は、特攻隊を志願する人もおり、死ぬことを怖いと思っていなかったそうです。被爆した時は、学校におり椅子の下で気絶をしましたが、幸いけがをしておらず、自宅へ帰るため、原爆投下直後のまちを歩き回りました。けが人が多く、道を通るのが大変でなかなか自宅へ帰れなかったこと、またその際に目撃した悲惨な状況などについてお話をされました。

【生徒の感想文より】

・「実際に経験した方が少なくなっていく中、誰も経験してないからといって恐怖を後世に伝えず、戦争離れを深刻化させてしまうようなことには私は絶対にしたくありません。」  
・「今回最も印象に残ったのが『死ぬことが怖くなかった』というお話だ。私はまだまだやりたいことがたくさんあり、死に対する恐怖心がある。戦時中、今の私たちと同じ年頃だった野瀬さんがそのように思っていたというところに、戦争の真の恐ろしさを感じた。」

↓お話の詳細は22ページ、生徒の感想文は25ページから27ページをご覧ください。

第七中学校、緑野中学校、南中野中学校

語り部の鈴木容子さんは、小学校三年生の時、縁故疎開先から一時帰宅した翌日に自宅で被爆しました。爆風で壁にぶつかり気を失い、気が付くと、外はあたり一面が瓦礫になっていました。勤労奉仕中だった父親は、全身の火傷で四日後に亡くなり、母親は、あごがはずれ、火傷を負いました。誰とも分からない状態で亡くなる多くの人々を目撃し、生命の尊さを一切拒否されてしまう恐ろしさ、二度と戦争を起こしてはならないという思いをお話されました。

【生徒の感想文より】

・「戦争は人間の体だけでなく心まで、容赦なく傷つけていく。また、その一回傷つけられた心は、その人自身を深く苦しめ、死ぬまで傷つけ続ける。しかし私達はまだその重大さに気が付いていない。二度と同じ過ちをくり返してはいけないと心の底から理解しなくてはならないのだ。」  
・「私はこんな事があつては本当にいけないと思います。太平洋戦争の時は日本がまいてしまった種。私たちが大人になったら絶対そんな事はしない。させないと心に誓ってこれからの人生を生きしていきたいと強く思いました。」

↓(第七中学校) お話の詳細は28ページ、生徒の感想文は31ページから32ページをご覧ください。

↓(緑野中学校) お話の詳細は51ページ、生徒の感想文は54ページ

から56ページをご覧ください。

↓(南中野中学校) お話の詳細は57ページ、生徒の感想文は58ページから60ページをご覧ください。

#### 第八中学校、北中野中学校

語り部の森正幸さんは、中学校二年生の時、軍事工場に動員させられていましたが、肺炎で広島市外の自宅での療養中に原爆が投下されました。直接被爆は免れましたが、翌日工場や友人の様子を見に広島市へ行き入市被爆をしました。建物疎開作業に出ていたクラスの友人たちが皆亡くなったため、怪我をしていないのが、肩身が狭かったそうです。直接被爆はしなくても家族を探すため、爆心地へ行った人々が次々と原爆症で亡くなりました。当時は放射能の知識がなかったため、とても恐ろしかったそうです。

#### 【生徒の感想文より】

・「森さんの話で印象に残ったのは、『自分だけが生きていていいのだろうか、と申し訳ない気持ちになった』ということ。(中略)生きていてを『申し訳ない。』なんて思ってしまうような世の中にしてはいけないと思う。」

・「助かって、そこで終わりじゃないこの戦争、原爆のおそろしさが痛いほど伝わりました。」

↓(第八中学校) お話の詳細は32ページ、生徒の感想文は35ページ

から37ページをご覧ください。

↓(北中野中学校) お話の詳細は43ページ、生徒の感想文は46ページから48ページをご覧ください。

#### 中野中学校

語り部の山田玲子さんは、小学校五年生の時、学校の校庭で被爆しました。主だった道路は、けがや火傷を負った人々がたくさんおり歩くことができないうらいでした。その後、集団疎開先で先生から日本の敗戦を知らされました。学校の校庭で茶毘に付された方多くは、名前を聞かれることもなく家族が確かめることもなく行き倒れた方でした。戦争の恐ろしさを知り、戦争の被害者にも加害者にもなっていないというお話でした。

#### 【生徒の感想文より】

・「もっと戦争や命のことを知り、学ぶ必要があります。そして、考え、『自分の意見』を持って互いの命を大切にし、尊重することがどれだけ大切なのか、『伝える』ことをしていきたいです。」

・「戦争のない時代に生まれ、自分の意見が言え、政治に参加する権利が与えられていることに感謝してこれからは生きていかなければならないのではないかと考えさせられる講演会でした。」

↓お話の詳細は62ページ、生徒の感想文は65ページから66ページをご覧ください。



# 第一部

「平和の語り部」からのお話と生徒の作文

平成二十七年 度「平和の語り部」派遣事業実施結果一覧

| 学校名    | 実施日       | 対象<br>学年 | 「語り部」氏名<br>(敬称略)      | お話の概要                  |
|--------|-----------|----------|-----------------------|------------------------|
| 第二中学校  | 6月25日(木)  | 3年       | 上島 昌之<br>(中野区赤十字奉仕団)  | 命を分けた入隊通知              |
| 第三中学校  | 6月25日(木)  | 2年       | 家島 昌志<br>(中野区原爆被害者の会) | 広島原爆投下後の様子             |
| 第四中学校  | 6月13日(土)  | 1年       | 土肥 幸子<br>(中野区赤十字奉仕団)  | 群馬県安中市での<br>訓導体験       |
| 第五中学校  | 9月4日(金)   | 3年       | 野瀬 節子<br>(中野区原爆被害者の会) | 広島原爆投下後の様子             |
| 第七中学校  | 10月15日(木) | 1年       | 鈴木 容子<br>(中野区原爆被害者の会) | 広島原爆投下後の様子             |
| 第八中学校  | 12月12日(土) | 全校       | 森 正幸<br>(中野区原爆被害者の会)  | 広島原爆投下後の様子             |
| 第十中学校  | 6月26日(金)  | 1年       | 伊谷 富美子<br>(中野区赤十字奉仕団) | せまりくる火からの<br>逃避(東京大空襲) |
| 北中野中学校 | 7月11日(土)  | 全校       | 森 正幸<br>(中野区原爆被害者の会)  | 広島原爆投下後の様子             |
| 緑野中学校  | 9月12日(土)  | 2年       | 鈴木 容子<br>(中野区原爆被害者の会) | 広島原爆投下後の様子             |
| 南中野中学校 | 5月21日(木)  | 全校       | 鈴木 容子<br>(中野区原爆被害者の会) | 広島原爆投下後の様子             |
| 中野中学校  | 7月11日(土)  | 全校       | 山田 玲子<br>(東京都原爆被害者の会) | 広島原爆投下後の様子             |

## 第二中学校 実施概要

- 1 実施日 平成二十七年六月二十五日（木）
- 2 対象 三年生
- 3 語り部 上島 昌之 氏（中野区赤十字奉仕団）
- 4 テーマ 命を分けた入隊通知



## 第二中学校 語り部からのお話

昔、中学校は五年制で、私は昭和十八年三月に卒業するはずだったが、戦争になって十七年の十二月に卒業した。十二月二十七日の卒業式後、十二月二十六日付で飛行機のプロペラの試作・研究する会社に入社して入隊まで三年間頑張った。会社には軍人の将校が三名派遣されていた。この間会社の上空で戦闘機の空中戦、近辺の高射砲陣地が空爆された時など、目撃した。

その後昭和二十年四月に入隊の通知が届いた。このハガキには、大刀洗航空隊と八日市航空隊の名前があり、大刀洗航空隊は、二本の線で消してあった。入隊日は五月一日だった。

四月三十日、中野駅から集合地東京駅に向かい八日市航空隊に入隊する人が臨時列車で出発した。途中浜松市が艦砲射撃などで東海道線が不通となり、浜名湖をめぐる遠回りをして米原に夜到着、この日は米原の警察署の体育館で一泊し、翌一日早朝航空隊に無事入隊した。

航空隊の日課は、朝食後飛行場に行き、塹壕を掘り二十ミリの機関砲を設置すること。夕刻には機関砲は隊内に持ち帰り保管するのが仕事だった。飛行場には幾つもの塹壕と機関砲が設置されたが、飛行機と機関砲はB 29に見えれないように隠していたので一度も爆撃されなかった。B 29は、右に行くと大阪、左へ行くと名古屋が目的だった。

B 29 が飛来して来ない間合を利用して、飛行機は琵琶湖で射撃の練習をしていた。

戦争が厳しくなり、八日市航空隊は疎開する命令が出され、私たちは富山の山奥、砺波に本部を置き更に奥の井波の民間会社を接収した工場へ行くことになった。

そこは飛行機の組立工場で、一般の職員と一緒に作業をすることになり終戦まで頑張ったが、部品が足りず機体は完成しても飛ぶことができなかった。終戦まで一機も完成できなかったのだ。

朝から夕方まで工場の仕事が終わわり、時間の余裕が充分あり軍隊の規律も適用のない一般職員と同じ生活だった。そこで大学出の小隊長が考え、兵隊で手紙も書けない人間が多かったので、小学校低学年の教科書で勉強を教えることになり、私が先生に指名された。

また休日には、町の方から木銃を借りて銃剣術を教えることになり、私が一級の免状を持っているということで、そこでも教師となり終戦まで大変多忙な生活を送った。

戦争は前線だけでなく、内地でも空爆があり多くの人々が亡くなった。特に長崎・広島の子爆弾はどうあれ使用してはいけない問題だと考える。皆さん何があっても戦争はしてはいけないのだと感じて欲しいと思う。

最後に私は、八日市航空隊一月半、井波の工場で二月半の軍隊生活だったが、入隊通知の変更があったので終戦まで直接戦闘に参加せず無事に今日を迎えている。

大刀洗航空隊は米軍により壊滅的攻撃を受けたそうである。

平和とは

三年 色平 野々花

平和がどんなものなのか、先日の上島さんのお話を聞いて改めて考えました。

お話の中で一番印象に残ったのは「ヤマハが戦闘機のプロペラを作っていた事」です。今では楽器といえばヤマハ。楽器を作る、という平和な会社さえ武器を作っていたというのは、衝撃的でした。人に喜びを与えるための道具の材料を、命を奪う武器に使っていたと考えると恐ろしく感じました。戦争は人の喜びを恐怖にすり替えてしまう、狂気的なものです。喜びは平和に必要不可欠です。

上島さんはお話の中で、戦争へ行って戦ったわけではないですが、とおっしゃっていましたが、戦時下の人々が不自由を強いられていたことに変わりありません。切符制による食料、衣類の制限、娯楽のない生活、家族を戦地へ送り出さなければいけない悲しみなど、人々には幸せを感じるようなことがない日々だったのです。私は、そんな生活、考えられません。ご飯を満腹に食べ、暑さ寒さにたえられる服を着て、本を読みたいのです。今は当時より比べものにならないくらい自由だと思います。不自由な国は、平和から少し離

れています。

そして、家族が戦地（フィリピン）から帰ることができなかったというお話を聞いて、安全であることの平和を考えました。戦時中、空襲や戦地へ送られる事によって侵される安全はあまりにも多くの犠牲者を出しました。火事で家や家族を失う人、被爆し、後遺症に苦しむ人、亡くなった人以外にも、戦時下にいた人のほとんどが被害者です。平和は戦争がある限り訪れません。

最後に、私は平和に必要なのは、喜び、自由、安全だと考えます。争いは平和を遠ざけ、人々を不幸にするばかりです。私たちは戦争があつた事実を重く受けとめ、これからの未来で、二度と戦争をしないと決意しなければなりません。

## 「平和の語り部」について

三年 大森 晃義

て平和になるためには一人一人が平和について考えることが必要だ  
と思えました。

ぼくは「平和の語り部」で印象に残ったことが二つあります。

一つ目は、戦場だけで戦争をしているわけではないということ  
です。それは戦場で銃を撃つたりしているだけでなく、普通に暮ら  
している人も空襲などの被害をうけているということです。空襲だけ  
ではありません。戦争のために楽器などをつくる会社が飛行機のプ  
ロペラをつくっていたと聞きました。ぼくはとても驚きました。な  
ぜそこまでして戦争をしなくてはいけないのかと疑問にも思いまし  
た。

二つ目は、戦争の悲惨さです。戦争に学生まで出兵されていたと  
聞きました。ぼくがあと五年くらいで兵士になんて考えることもで  
きませんでした。戦場から生きて帰ってこられても空襲で家が焼け  
てしまった人もいたと聞きました。戦争に勝利した国は喜ぶかもし  
れませんが、でも戦争に勝った国も負けた国の人も家族を失ったら、  
すごく悲しみます。ぼくは人を殺してまで資源や土地をとるのは絶  
対に間違っていると思いました。

このようにぼくは「平和の語り部」で戦争の恐ろしき、戦争は良  
くないということがよくわかりました。ぼくは平和とは戦争などの  
争いごとで苦しむ人達がいなくなるということだと思えます。そし

## 平和の語り部

三年 宗野 かれん

今回、戦争の時の話を聞いて私は改めて「戦争は二度とくりかえしてはいけない」と思いました。

なぜなら「戦争は絶対しない方がいい」というのを何回も言っていたからです。それだけ反戦に対する強い気持ちがあるんだな、と感じました。私にも九十歳くらいのひいおばあちゃんがあります。ひいばあちゃんは認知症でかれんの名前も覚えていません。でもたまたまに戦争の話します。すごく詳しく話してくれます。その時、いつも言うのが「戦争はしない方がいい。」

やっぱり戦争は絶対にしない方がいいんだとすごく思いました。上島さんの言葉で印象に残ったのが、「戦争は鉄砲を持って戦うだけじゃなくて飛行機とかを作っていたのも戦争にかたんしていたことになる」です。私は戦っている兵士しか知りませんでした。そしてこういうのを国家総動員法というのだと思いました。

あと最後の質問の時間に「あなたにとつての平和ってなんですか。」という質問に対して、「今、生きていることです。」という答えにびっくりしました。私は「戦争のしない世の中」と言うと思いました。当たり前なことを当たり前前にできることが平和かつ幸せなんだな、と感じました。

今、私たちは平和な環境で生きています。明日もごはんを食べられます。私たちからしたらすごく当たり前なことです。でもこの世の中では、これらが当たり前じゃない国もあります。いつも通り暮らせることが幸せなんだと感じて、「今」を大切にしたいです。

## 第三中学校 実施概要

- 1 実施日 平成二十七年六月二十五日（木）
- 2 対象 二年生
- 3 語り部 家島 昌志 氏（中野区原爆被害者の会）
- 4 テーマ 広島の前爆投下後の様子



## 第三中学校 語り部からのお話

四月の末から、国連でNPT（核拡散防止条約）再検討会議が行われた。核拡散防止条約の再検討を五年ごとに行っており、私も最初の八日間だけ被爆者代表として傍聴したり被爆証言活動をしたりした。日本は被爆国であるのに、世界の世論をリードすることができず、核兵器廃絶を求める署名にもなかなか応じなかった。今回の会議の前哨の会議で、ようやく署名をした。多少前進した面もあるが、今回も最終文書の合意ができず、核兵器廃絶への道は遠いと感じた。

原爆が落ちた時、私はあと少しで三歳二ヶ月になるところだったため、断片的な記憶しかない。父は広島通信局へ勤めていた。軍事郵便を扱っており、重要な役目を担っているため、兵隊としては徴用されなかった。その日は、夜警当番で、一晩中起きていたため帰宅して仮眠中だった。そこへ原爆が落ちた。せん光に驚いて階段口まで飛んできた。爆風で階段の下まで飛ばされた。私は、玄関先で遊んでいたようだが、何とか無傷だった。母は玄関隣の部屋にいたらしいが、爆風で、家中のガラスが飛びハリネズミのようになった。近所に住んでいた看護師に手当してもらい、命を失うことはなかった。妹は、いつも日当たりのいい窓に向けて寝かされていたが、その日に限り、布団袋の裏側に寝かされていたおかげで、生後十ヶ月だったが無傷だった。



原爆は、上空五百八十メートルのところ爆発した。この高さは、スカイツリーのアンテナ部分の真ん中位である。火球の温度が一万二千度で、地表の直下の温度は三千度にもなった。太陽の温度は、五、六千度といわれている。瞬間に太陽が二つできたような感じである。直下にいた人は、即死。半径五百メートル以内にいた人はほとんど即死した。

私たち一家は何とか命はとどめた。当日私の家に、親戚の娘さんの新婚夫婦が入営するため泊まっていた。朝一番でヒロシマ西練兵場へ行ったので、父は心配して見に行つたが、真っ黒焦げの死体を見ても特定できなかった。あきらめて帰る途中、見送りに行つた親戚の娘さんが、大火傷をしてひっくり返っているのを見つけた。顔から手、胸の下まで大火傷で、持ち上げようとしても皮がずるっとめくれ背負うことができない。農家から大八車（木造の二輪車）を借りて、積んで家に帰った。夏なので、火傷がすぐに腐りうじ虫がわいて強烈な臭いがする。今でもその臭いは覚えている。

この人は被爆後二十五年以上経って甲状腺がんで亡くなり、一年遅れて鳥取県へ引っ越してきた父親も被爆後、二十四年経ってから上顎がんでこの世を去った。

食糧事情は戦争中から悪く配給制度だった。乳が出ないので、私は配給されたおかゆを飲んで育った。どんぶり一杯の中に、米が二粒くらいしかない水みたいなものだった。そのせいか、私は姉妹に比べて発育が悪かった。その後、一家は祖父母が住んでいた鳥取県

へ引っ越し、米子で成人をした。上京したのは、成人後である。

放射線というのは、当たった後もその場所から誘導放射線が出る。そのため、原爆投下のずっと後になり、救助したために原爆症になつた人がたくさんいる。厚労省の基準では、最初に浴びた放射線しか影響しないと定めており、そのために原爆症として認められず裁判が起こつた。裁判を経て、やっと原爆症の認定を勝ち取るということが続いている。今も全国で百九名の人が裁判で戦っている。原爆を開発したアメリカのマンハッタン計画の委員会の人は、原爆の爆発力のことには承知していたが、後に尾を引く放射能の影響のことは全く念頭になかった、と言っているのを報道で知った。七十年が経過したが、当時胎内被爆をしたり、幼かった人も晩発性で、後から影響が出る。それが放射能の恐ろしいところである。

皆さんも核の問題について、そして戦争を起こしてはいけないということを自分の頭で考えてほしい。人類が生きるか死ぬかの重要な問題であると思う。

平和の語り部を聞いて

二年 川浪 彩奈

私は今回、平和の語り部を聞いて戦争について初めて知ったことや平和な暮らしのありがたみを感じました。

その中で一番印象に残ったことは原子爆弾の威力についてです。なぜなら、その威力は私の予想をはるかにこえるものだったからです。例えば、熱風でも非常に高い温度だったといえます。硬貨や人間の皮ふまで溶かしてしまっただけです。なにしろ温度は太陽二つ分とおっしゃっていました。全く想像のつかない温度だと思っています。このような本当に一瞬の間で多くの人の命がうばわれてしまいました。

そして私がおどろいたことは放射線の被害です。十年、二十年たつてから放射線の被害が発症し、がんなどの病気になってしまふのは怖いことです。そのとき、戦争の被害は一時的なものではなく、永遠に続くこともあるのだと知りました。また放射線は目に見えないのでなかなか避けられず、恐ろしいと思います。

このように私は今回原爆の被害についても詳しく知ることができました。被害にあったことは本当に悲しく、悔しいけれど、地域や

近所の人たちと助け合い、協力して生活してきたという話を聞いて、一人では何もできないから協力することは大事だと思いました。そして、そんな過去があったからこそ私たちはしっかり将来のことを考えないといけないと思います。道徳の授業や語り部の話を聞く限り、戦争はしてもなにも得することはなくかえって人々の心や体に深い傷を与えるだけだと思いました。戦争はとても悲惨であり、恐ろしいということを後世に伝えていく必要があると思います。

## 語り部の話を聞いて

二年 御給 みのり

思いをした方々がたくさんいるのだから、もう二度と戦争なんてしてはいけないと思います。

今日、私達は広島の大原爆について語り部の話を聞きました。広島や長崎の大原爆の事、日本とアメリカとの戦争の事など、私はあまり詳しくは知らなかったのですが、どの話も衝撃的で、大原爆について理解を深める事ができました。

罪のない、平和に暮らしていた人々、少年少女が一瞬にして溶けてしまう事、家に押し潰されてしまう事。なにかもが私たちの今の暮らしとはかけ離れた残酷な内容でした。

語り部の方は広島の大原爆の時は、たったの三才だったようで記憶はあまりないとおっしゃっていましたが、大原爆で感じた嫌なにおいは今でも覚えているそうです。

もし私が行き残れた被爆者だったらどうだろう。身近な人々が溶けてなくなった、爆風に吹き飛ばされた、川に沈んでいた。こんな事があったなら、きっと生きる力をなくしてしまうと思います。大原爆が落ちた時の年齢が三才だったとしても、他の国の人々や他の地域の方々には自分の体験談を話す事はできないと思います。

だから私は、昔の悲しい体験談を話して下さった語り部の方にとっても感謝しています。そして今の私達の暮らしている環境がどれだけありがたいものなのかもよく実感できました。辛い思い、悲しい

## 平和の語り部を聞いて

二年 崎浜 海来

実際に、原爆を受けた家島さんの話を聞いて、その日の原爆の怖さを改めて知りました。三才の頃だったとはいえ、今でも少し記憶が残っているということは、本当に辛く怖い体験だったんだなと思います。

原子爆弾が落とされた瞬間は、すごい光と爆風だったと言っていました。何が何だか分からなかったし、きつと予想もしていなかったことだから、とても怖かったと思います。妹は無事で、お母さんは、体に沢山のガラスが全身に突き刺さっていたそうです。ほんの一瞬の出来事で防御するにも出来なかったんだと思います。自分の身になって考えるだけで鳥肌が立ちました。親戚の方は、大火傷を負い、体にはうじ虫が沢山いて、とても臭いがすごく、その臭いは今でも思い出せる程だそうです。身近な人でそういったことがあるということは、驚きというより、やはり恐怖が大きかったんだと思います。その場での現状、雰囲気、それを想像するだけでも恐ろしいと思います。

被害は、放射線によって十年、十五年後に病気になったり、命を落としてしまったりと家島さんは「放射線が一番恐ろしい」と言っていました。確かに目に見えないもので知らない内に、というのは

確かめることもできないし、怖いと思いました。

こんなにも恐ろしいことが起きたということを知り、今がどんなに平和かを思い知りました。核兵器を無くして欲しい、戦争を二度と起こさないで欲しい、そう心にとどめようと思います。「戦争」、「原爆」、一度に多くの命をうばうこと、この言葉を聞くだけで恐ろしいし、悲しい気持ちになりました。今私達は食べ物も水もあり当たり前のように生活し、「幸せ」の人がほとんどだと思います。だからこの出来事を忘れず、また、知ってほしいと思いました。

## 第四中学校 実施概要

- 1 実施日 平成二十七年六月十三日（土）
- 2 対象 一年生
- 3 語り部 土肥 幸子 氏（中野区赤十字奉仕団）
- 4 テーマ 群馬県安中市での訓導体験



## 第四中学校 語り部からのお話

私は、一九二五年生まれ。当時は、男子も女子も軍需工場で働かなくてはならず、何もしないで家にいることは許されない時代だった。学校でも、若い男の先生は、兵隊で戦地に行ってしまう、ご年配の先生しかいない。学校を卒業しても、東京には、空襲のため出て来ることができず、田舎にいても何かしなくてはならなかった。そのため資格の勉強をして、国民学校の先生になった。

縁故のある人は縁故疎開、縁故のない人は集団疎開で集団生活を送っていた。本当にものがない時代。学校で今のような給食もない。食べ物もなく、お芋とかぼちゃが主食の時代。お芋のご飯といっても、お芋にご飯粒が少しくっついていてる程度のご飯だった。それでもいただけるのはいい方だった。

学校では、一、二、三年生を担当していた。大きい学校で、全生徒は、千二百人から千三百人位いた。上履きも運動靴も当時は、不十分でクラスに七、八足しかない。券を使って順番に靴を買っていた。券がなければ靴も買えない。学校に行くのも靴がなく下駄で通っていた。学校の門の周りの桜の木が、全部下駄を作るために使われ、子どもたちに配給された。その頃の子どもたちは、下駄とか裸足の子どもが多く、皆足の指が開いていた。

動物性たんぱく質も配給で少しあるだけで、ほとんど食べられなかった。そこで、時間があると子どもたちを連れて田んぼに行つて

イナゴ捕りをした。イナゴ捕りは、竹ぼうきの先にお母さんに縫ってもらった手ぬぐいの袋を付けて行った。それを使えば、イナゴが飛び出ないようになっている。イナゴを一晩つるしておくとおなかの中のものが出て、からからになる。それを処理して佃煮にしたりふりかけにしたりする。当時は、それが一番のたんばく源だった。イナゴはお米と同じ値段で売れるので、子どもたちは料理屋に売ったり自分で食べたりするため、一生懸命捕った。子どもたちが喜ぶので、よくイナゴ捕りに行った。

今もイナゴ捕りは聞いたことがあるが、処理までは難しいと思う。今は捕らなくても、食べるものがあるから恵まれている。当時の子どもは、学校にお弁当を持っていくこともなく、持って行くとしても日の丸弁当くらいだった。日の丸弁当は、お弁当箱にご飯を入れて梅干し一個だけ。先生が来て、何か他のものが入っていないか皆のお弁当を見て回っていた。皆それを守って、その日だけは、おかずなしで梅干しだけでご飯を食べた。

皆戦争には、勝つと思っていたから協力した。皆が疎開で来るよいうな田舎の町だったが、遠くの方で飛行機を造っている会社があり、そこが爆撃されると空が明るくなった。それでも直接怖い思いをしたことは一度もなかった。

前に、母親が竹やり訓練をしている姿が今でも目に焼き付いているという人の話を聞いたことがある。確かにそういう時代で、男の人は皆いないので、女の人だけで、アメリカ軍が上陸すると竹やり

で殺せると思っていた。

私は、戦後すぐに東京に出てきて、焼け野原の時から東京に住んでいる。平和は大事だと思うし、戦争だけは嫌だと思う。皆さんも食べ物を大事にして、文句を言わずにお母さんの作ったものを召し上がって大きくなってほしいと思う。

平和の語り部

一年 森田 ひいろ

とても不安だったそうです。祖母の家族は誰も亡くなっておらず、全員無事だったそうです。

私は戦争の時代、生きていませんから、そのときのことはよく分かりません。ですが、戦争のことが忘れられないように、私の知っていることを語りついでゆきたいと思います。

土曜日、平和の語り部がありました。語り部は、土肥幸子さんです。土肥さんは、実際に戦争を体験したわけではないようですが、戦争中のお話しして下さいました。

戦争中のご飯は、いもやかぼちゃが主食だったそうです。私なら、味にあきたり、それだけでは物足りませんが、当時の人達は、食べられるだけ幸せと生きていたそうです。一番のたんぱく質は、いなかだったそうです。今なら、牛乳とかチーズとか、乳製品がたくさんありますが、いながたんぱく質ということは、当時の人達はみんな栄養不足だったと思います。実際に戦争を体験していなくても、こんなに食料が不足していたということは、それだけ大きな出来事だったのだなと改めて思います。

さて、ここからは、戦争を体験した祖母に聞いた話です。

祖母は東京から茨城へそかいしたそうです。一緒にそかいした友達と体をよせ合いながら泣いていたそうです。東京の方を見ると、いつもは真つ暗なのに、その日は真つ赤に燃え上っていたそうです。八月十五日、戦争が終わると自分の家族がむかえに来てくれるまで、

## 戦争とは

一年 山口 のぞみ

六月の学校公開日、「平和の語り部」の授業があった。土肥幸子さんという戦争を実際に体験した人が、戦争について話しに来てくださった。戦争では、小学四年生以上の子どもが、えんこのある子は親せきや知り合いのいなかの家に、えんこのない子は、集団そかいをさせられたそうさ。また、土肥さんはその当時、先生をさされて、生徒をつれ、田んぼへ行き、いなごをとっていたそうさ。それをつくだににして食べ、貴重なたんぱくげんになっていたそうさ。そして、アメリカ軍に絶対に勝てないと分かっていたながら、竹やりで殺す練習をしていた人もいたそうさ。とても悲惨だったことが伝わってきた。

私にとって戦争とは、二度とあつてはいけないことだと思ふ。なぜなら、たくさん死者が出て、誰も得することはないからだ。また、戦争になった原因の中でも、話し合つて、解決できた部分もあったと思ふからだ。たしかに、今、こうして作文を書いている時間にも、国の中の争いなど戦争は起きている。しかし、戦争をしていないから関係ないということではなく、その戦っている人達を和解させようとしたり、できることはあるのではないだろうか。これからは、戦争がなくなり、世界が平和のために各国が協力し合つてい

くと同時に、何か小さな活動でも、平和につながるのなら、積極的に参加していくようにしたい。



## 食べ物の大事さ

一年 横山 萌佳

土曜日に土肥幸子さんに戦争のことについて教えていただきました。戦争中の学校には男の先生は戦争に出ているので女の人が年配の方がいました。物が無い時代でもちろん給食もありませんでした。いもやかぼちゃが主食で、時間がある時は田んぼに行っていなごを取りタンパク質とって食べていたそうです。いなごを食べるにはまず、いなごを取ったら袋に入れ一日経つといなごのおなかのものを出してからふりかけにしたり色々調理していたそうです。お弁当の日は月に一回だけあり日の丸弁当（米の中に梅ぼし一つ）を持っていったそうです。弁当にほかのものがないか先生がチェックしていたということです。次にくつについてです。くつは順番に買っていたそうです。くつが買えない、無い、という人はげたなどをはいて学校に来ていました。桜の木はみんなげたになって子どもの足は指がひらいていたそうです。女の人はアメリカ軍の人が来たら殺そうというので竹やりの訓練をしていました。

私はこの話を聞いて、私が当たり前のように残していたり好き嫌いがあったりしているのが申しわけなくなりました。この話を聞き食べ物がすごく大事だなあと思いました。なので食べ物を大事にしてのこさず食べようと思いました。

## 第五中学校 実施概要

- 1 実施日 平成二十七年九月四日（金）
- 2 対象 三年生
- 3 語り部 野瀬 節子 氏（中野区原爆被害者の会）
- 4 テーマ 広島の前爆投下後の様子



## 第五中学校 語り部からのお話

私は直接被爆したが、こんなに長い間生き残ったことが不思議で仕方ない。今は残されて生きているということに感謝している。

生まれてすぐ満州事変が始まり、女学校一年生のとき太平洋戦争が始まった。太平洋戦争からは、勝ったニュースばかりで、日本の被害については、伝えられなかった。二年生頃から、軍服を作る工場へ行き、三年生頃からは、鋏を持って、校庭を掘り野菜を植えるという奉仕があった。英語は一年生の時のみで、二年生からは敵国語は一切使ってはいけなかった。お上の言うことを聞いて、勝つまでは耐える生活を強いられた。今の子どもたちを見ると、なんて幸せなのだろうと思う。

女学校の五年生になった時に、学徒報国隊が結成され、その四月に、「神風」と書いてある鉢巻を付けて作業に出た。五月には、海軍の司令部のあった呉の広町で、戦闘機を作っていた。私達は作業をするため、寄宿舎に入れられ、兵隊と同じ生活をさせられた。寄宿舎は、二段ベッドで八人部屋。昔工員が寝泊まりしていた場所であり、ノミや南京虫がたくさんいて、具合が悪くなり家に帰らされた人もいた。

兵隊と同じように、起床と同時に廊下にびたつと並び、点呼後、軍人勅諭を皆で読んだ。その後食事だったが、食事内容は海軍と同じで、ご飯はこよりゃんや大豆を押しつぶしたような、馬の飼料に

なるようなもので、おなかを壊して熱を出す人もいた。朝は八時までに工場に行かなくてはならず、軍歌を歌いながら向かい、八時間働いて帰り、お風呂は十五分と決められた厳しい生活だった。

呉は、軍艦武蔵や大和を造っていたので空襲があり、大きな工場は全部壊された。空襲の時、近くの丘の防空壕へ逃げると、皆が次々と逃げ込むので、防空壕の入口の扉が閉まらなかった。順に奥に詰めていったが、転ぶ人もおり、人々が折り重なっていった。そうしただ中、爆風が入ってきて、宇宙飛行みたいに体が浮き、履いていた靴もどこかへ飛んでしまった。私は幸い手を引っ張ってくれる人がいて奥に逃げられたが、一番下で亡くなった人もいたそうである。

当時私は、十六、七歳だったが、いつ死んでもいいという気持ちだった。男子は、中学生でも神風特攻隊を志願する人もおり、その人たちのことを忘れないで私達も頑張りましょうという精神で、死ぬことを怖がっていなかった。

原爆が落ちた時、私は椅子の下に潜ったので火傷はしなかったが、気絶はしていたらしい。先生の、「下敷きになった人はいないか。這って出てこい。」という声がして、椅子の下から這って出た。真夏の暑い日だったが、外は暗く、夕方のようにしんとしていた。

けがをしなかったので、中心地の近くの寄宿舎へ助けに行くことになった。しかし、皆死んでいたらしいということが分かり、引き返すことになった。向かう途中、中学生くらいの作業に出ていた人が、幽霊のように皮膚がぶら下がった状態でぞろぞろ逃げて来た。

原爆投下直後、中心地の温度は三千度から四千度もあったので、人は一瞬にして焦げてしまい、真っ黒に焦げた死体が、市電の線路をはさんで外側に頭を並べていた。中心地は静かで声も聞こえなかった。中心地から二キロくらい離れた場所では、死にきれなくて手を動かす人がいたり、下敷きになった人が助けてと言ったりしていた。

今度は隣の病院へ助けに行けと言われた。中では、医者が、赤チンも包帯もないと騒いでいた。病室は全部けが人で、私達は何もできなかった。

家に帰ろうということになり、同じ方向の人で相談をして、土手を真っ直ぐ行くことになった。土手から下を見るとけが人が寝ていた。ちょうど引き潮で浅瀬になっており、その中を歩き、ある程度進んでから、土手に上がって帰ろうとしたが、火事で通れなかった。また学校に戻ろうということになったが、今まで来た道は、けが人がたくさんいて通ることができない。違う道に戻ることにになり、遠回りして山を越えて裏から学校に帰ることにした。山では、裾から頂上まで全部けが人で埋まっていた。歩けないくらいの山道を頂上まで行き、噴水で水を飲んでいたら、道々で水をちようだいと皆に言われた。水をあげるとすぐに死んでしまうと言われていたので、水はあげられず、持っていた乾パンや包帯を、生きていた方の枕元に一つずつ置いた。反対側に降りると、カバンを置き忘れたことに気付いた。中には、私の縫った制服が入っており、先生に見てもら

おうと思っていたので残念だったがあきらめた。学校に着いたが、お腹がすいていることも忘れていた。先生には、夜になるといけなから早く帰れと言われた。先生も困ってしまったのだと思う。

今度は電車道を通って帰ることにした。電車道は、広島原爆投下の中心地を通っているが、当時は、そのことを知らなかったのもので、中心地の原爆ドームを通って、練兵場も通って行った。原爆が落ちた時、練兵場には兵隊が集まっていたらしく、真っ黒で炭になった死体で埋められていた。周りを見ると広島城はつぶれていて何も無い。護国神社の鳥居だけが残っていた。

一時疎開していた場所に帰ると母が門のところで待っていた。私が一番に帰ったらしく母は喜んでくれた。家は、玄関とトイレだけ残り、あとは全部なくなっていた。父と母は中心地に兄を探しに、朝から晩まで、二週間歩き回ったが見つからなかった。

そこでは過ごせないのもので、田舎に行くことになった。父が大人車を借り、残っているものを積んで母と私と三人で夜二十キロの道を歩いて、疎開先の道を歩いた。朝までに大人車を返さなければいけないので、荷物を下ろして広島へ帰った。帰る途中、十五夜のような大きな月が見えた。その下に、オレンジ色の物体が広島の方から飛んできた。火の玉だったのだろうと思う。毎晩死体を焼き、リンが浮くのをみていたので、リンが固まって火の玉になったのかなと思っただが、父や母には話せなかった。

けがをしていなかったのも、近所の人に奉仕に出るように言われ、

隣家の娘さんと二人で奉仕に出た。そこでは、地方から広島へ来た兵隊が鶴嘴で死体の片付けをしており、土手の上に死体を上げて大人車に山積みになっていた。そして積んだ死体を焼き場に持って行った。私達は、押して運ぶのを後押しするよう言われたが、二、三日経った死体はふくれるだけふくれ、仰向きで大人車に積まれていたので、顔を見るのが怖くて逃げて帰った。

一週間何を食べたのか、乾パンを食べたこと位しか覚えていない。よく我慢して過ごしたと思う。

戦争をしたから原爆が落ちた。今は、原爆の何倍も怖い兵器があると聞く。戦争だけはほしくない。

忘れてはいけない恐怖

三年 井戸田 颯

私は今回、実際に戦争を経験した方の話を聞くというすぐ貴重な体験をしました。そしていかに今の自分の日常が幸せで恵まれているかということを感じました。

原爆の落ちた恐怖を私は知りません。もちろん悲惨なことであることは理解していますがその原爆の本当の恐怖は実際に経験した方であれば分かりません。しかし今の日本人はその大きすぎる恐怖に背を向けている気がします。この恵まれた社会の中で生活し戦争というものを身近に感じていないからです。ある番組では若者に原爆投下の日にちを聞いたところ、答えることの出来ない人が少なからずいるということを取り上げていました。絶対に忘れてはいけない戦争という恐怖。それを苦しい思いを抱えながら伝えてくださる実際に経験した方々。その方々のためにも実際には経験していない私たち若者は戦争という恐怖をしっかりと認識しなければならぬと私は思います。

若者の戦争の知識が薄れていっている中で実際に経験した方のお話を聞かせていただいた私たちはその恐怖を同年代や後世に伝えな

ければならないと思います。確かに実際に戦争を経験した方々に比べれば本当の恐怖を知らない私は伝えることも数少なく説得力も何も無いと思います。しかしこのまま実際に経験した方が少なくなっていく中、誰も経験していないからといって恐怖を後世に伝えず、戦争離れを深刻化させてしまうようなことには私は絶対にしたくありません。なので今回の話を通して学んだ多くのことは自分の胸の内に留めるのでなくどんどん後世に伝えていきたいと思います。恐怖を忘れさせないために。

## 戦後が未来へ続くように

三年 今井 八彩

戦後七十年の今年、また十五歳という節目の年齢である今年、広島原爆のお話を聞くことが出来たのは本当に良かった。小学生の頃広島原爆ドームを訪れたことがある。そのとき、何も知らずに行くのはどうかということと両親が薦めてくれた本を読んだ。その本は実際に広島で起こったことを物語の形にし、子どもにもわかりやすいようにしたものだった。タイトルこそ忘れてしまったが、その内容は今でも覚えている。あまりにも悲惨な話でなかなか受け止められず、それを読んだ日の夜はあまり眠れなかった。

原爆ドームを訪れたときもキレイに整備された街に囲まれた空間にぽつんと建つ建物を昔どれほどすさまじい爆弾が襲ったのか、上手くイメージ出来なかった。平和記念資料館にも怖くて入れなかった。今まで自分が目を背け、怖いからと逃げてしまったことを後悔してきた。だから直接お話が聞けると知ったときはとても嬉しかった。

今回最も印象に残ったのが「死ぬことが怖くなかった」というお話だ。私はまだまだやりたいことがたくさんあり、死に対する恐怖心がある。戦時中、今の私たちと同じ年頃だった野瀬さんがそのように思っていたというところに、戦争の真の恐ろしさを感じた。

また、最近スマートフォンなどで簡単に情報が手に入るため信じがたいが、情報の閉ざされた戦時中、政治家の「勝っている」という言葉に日本全体がだまされていたことは忘れてはならない。

「どうか戦争だけはしないで」という野瀬さんの思いを次の世代までつないでいくため私に出来ることは何だろう。きちんと歴史に向き合い学ぶこと、戦争反対と声をあげること、世界の戦争で苦しんでいる方々のための募金などに協力すること。まだまだ未来への可能性は広がっている。

私たちがやらなければいけないこと

三年 須田 爽代

先日の野瀬さんの戦争体験を聞いて、私が思ったことは三つある。  
一つ目。戦争は、どんなに愚かで悲しいことか、ということ。そんなことは、誰でも分かっているかもしれないが、私は今回の戦争体験を聞いて、そう感じた。地球よりも重い、数え切れないほどの人の命が、次々に滅びることが、戦争の一番怖いところだと思う。もっと生きたいと、思った人もいたはず。そのように思った人のことを考えると、私は胸が痛む。

二つ目。私たちはどれだけ幸せなのか、ということ。そして、戦争中には比べものにならないほど、私たちは贅沢をしていること。戦争体験をお話ししてくださった、野瀬さんはこんなことを話していた。「あなたたちが、天国にいるように見える。」と。あの辛い戦争を体験してきたのだから、本当にそう見えるのだろう。私は、野瀬さんの言葉を聞いて、自分は贅沢をしていないのだろうか、と考えてみた。すると、思い当たることはいくつか出てきた。例えば、ペン。使おうと思って買い、結局使わずに捨ててしまったことがある。戦争中は、こんなことはできなかったのだから、私たちは今の時代にもっと感謝すべきなのではないか。

三つ目。私たちが戦争の話を次の世代へ語り継いでいかなければ

ならない、ということ。私はまだ、語り継がなければいけない、本当の意味を完全には理解していない。だが、少しなら分かる。私の今が、語り継がなければいけない立場だから。戦争は、もう、この先も、またその先も、絶対にやってはいけない。戦争で得るものは、何一つ無いのではないか。今の日本は、北朝鮮、韓国、中国などと危ない関係にあるが、同じことを繰り返してはならないと、伝えることが、語り継ぐ本当の意味の一つだと、私は思う。

## 第七中学校 実施概要

- 1 実施日 平成二十七年十月十五日（木）
- 2 対象 一年生
- 3 語り部 鈴木 容子 氏（中野区原爆被害者の会）
- 4 テーマ 広島の前爆投下後の様子



## 第七中学校 語り部からのお話

七十年前、日本はアメリカと戦争をしていた。この戦争は、日本が起こしたものである。真珠湾というアメリカの領土に奇襲作戦で爆弾を落とし、戦艦を相当沈めてしまったのが事の起りである。

七十年前の夏、空襲警報が鳴ると、防空頭巾をかぶり防空壕に入ることになっていた。全校生徒が入るので、皆折り重なった状態で、空襲警報が解除されるまで黙々と座ってはいなくてはならない。苦しくて、早く出たかった。何人も気分が悪くなる人がいたが、倒れても介抱してくれる人はおらず、そのままだった。空襲警報が解除された時は、死に物狂いで外に出て行った。ところが、学校に着いてノートを開いたとたん、また空襲警報が鳴る。あんな苦しい経験は二度としたくない。

学校では勉強もできないので、空襲警報があまり鳴らない場所に疎開することになった。集団疎開といって山奥のお寺があるような場所に集団で疎開し、そこで勉学をすることになった。私は、母の故郷が山口県にあったので、そこに単身で疎開をした。

八月五日に、たまには家に帰って両親と過ごしようということとで姉が迎えにきた。両親に会えるということ嬉しかった。そして翌日の八月六日にとんでもない出来事が起こる。朝の八時十五分、ピカッと光ったとたんにも見えなくなった。その次にドカーンという爆音とともにものすごい風が吹いた。私は爆風に吹き飛ばされ



て、壁にあたつて脳震盪を起こし、しばらくは気を失っていた。気が付いて、煙がただよう中を歩くと、あつたはずの家がなく、みんな瓦礫になつており、私の家が倒れなかったのが不思議なくらいだった。ずっと向こうに今まで見えなかつた川が見える。すごい状態だなど思っていると、目の前を焼けただれた人間とも思えない、皮膚がぶら下がつた人達が歩いてゐる。男性か女性かもわからない、髪の毛は燃え尽きて無くなつていて、顔は焼けて目玉がぶら下がつてゐる。今思うと恥ずかしいが、そういう方を見た時、幽霊かと思つたくらいだった。目的の場所まで歩いて行けばいいが、途中でつまづいて転ぶと、もう起き上がる力がなくそのまま亡くなる。死体がごろごろ転がっており、歩いてゐる人は死体を踏んで歩いてゐた。

母を探しに家に入ったが母は埋もれてゐた。姉が掘り出そうとしていたが、大変な時間がかかる。私も手伝つたが小学校三年生、九歳でお手伝いできるものではなかつた。やつと母親が出てきた時には、これが母親かと思うような幽霊のような状態だった。あごがぶら下がり、目は前を向いてゐるがどこを見ているかわからないような状態で一点を見つめてゐる。話すこともできない。

向かいの病院に行つたら、火傷をしている人は、「熱い、熱い、水、水」と言つて、右往左往してゐる。ひどい人は亡くなつてしまひ、死体の山ができていた。そのうち道路が死体の山で通れなくなり、兵隊さんが来て、ものを片付けるように、死体を積み重ねていった。

挙句の果てにはガソリンをまいて火を付けた。誰ともわからない状態で死んでいく。家族が見たらどう思うか。戦争は人間の価値観も変えてしまひ、生命の尊さは一切拒否されてしまふ。悲しい事、怖い事である。重ねられた死体の中には、うなつてゐる人もおり、生きたままガソリンをかけて焼き殺されてゐた。私が、指をさして「生きてゐる。」と言つても、指をはたかれて、「指をさしてはいけない。あれはもうだめだ。」と言われた。

病院の列に並んでゐる人は一向に進まない。少し進んだと思つても、並んでゐる人が倒れて死んでしまふからだつた。一番前の先生のところを見ると赤チンしかなく、包帯もない。そんな治療しかできないので、母には「見てもらうことはできないよ。」と伝えた。母は、着ていたものの裾をやぶつて細長い包帯を作つて、ぐるぐる顔にまわしてやつと言葉を話せるようになった。第一声が「お父さんはどうなつた。」だつた。父は勤勞奉仕に出かけていたが、父だと分からない程の全身火傷を負ひ帰つてきた。声を聞いて父だと分かるくらいで、怖くてお父さんと呼べなかつた。父は四日間、「熱い、熱い、水、水。」と言つて亡くなつてしまつた。

母の火傷も時間が経つとハエがたかる。胸の火傷のところ、ハエが卵を産み、瞬間でウジになつた。こんなに早くウジになるのかという位だつた。つまんで取つてもハエがたかる方が多かつた。

母が水を汲んで来てほしいというので、何回も水を汲みに行つた。その最中に、「容子ちゃん、容子ちゃん、助けて」と呼ぶ声があつた。

私をとてかわいがってくれたおばさんが、瓦礫の下敷きになっていた。助けようと手を引く張るが、ずるずる皮がむけ、体が出てこない。引く張っても、引く張っても、私の力では助けることができなかった。そのうちに後ろから火が来て、熱くて我慢できなくなり、「容子ちゃんもういいよ。逃げなさい。」と言われ、見殺しにした。もっと大きかったら助けられたら。それができなかったのが悔しい。そのことだけが手記に書けない。こんな思いは、皆さんにはさせたくない。

私にとつて七十年間平和に過ごしていることは喜びである。しかし、この先皆様方が大きくなって、平和な家庭を築いていけるかは保障されていない。皆さんの力で平和を築いて欲しいと思う。私にこの先の七十年はないが、生きて多くの人たちに戦争の悲惨さを伝えていきたい。二度とこのようなことを起こしてはならないし、起こってはならない。

最後に私の手記を読ませていただく。

\* \* \*

沖縄にアメリカ軍が上陸した際、すでに日本は敗戦していたはずですが。にもかかわらず、戦艦とかB 29を何機撃沈と報道され未だ日本が優勢に戦っているように、嘘の報道がされていました。あの時日本が終戦を宣告されていたら、広島・長崎の悲劇は起こらなかつたと考えます。そして日本もあの戦争の責任をアメリカとともに負うべきです。そもそもあの戦争はどうして起きたのか。第二次世界

大戦のことを考えます。アメリカとイギリス対ドイツ、イタリア、日本。原因は何であったのか。そこまで追い込まれ、回避できなかった理由は何だったのか。そこまで追い込まれ、回避できない理由を知りたい。そして最後に原子爆弾を、戦争を終わらせるために落としたいと言っているアメリカの言い分、理解できません。地球上のありとあらゆるものを破壊してしまう核はどんな理由を付けても扱ってはいけないのです。核から得るものは何もないと考えています。便利さばかり求められています。それが核によるものであつてはならないと思います。特に学者の方に申し上げたい。あなた方がいたずらに核を研究して、得る物は悪魔の代物です。将来の人々のため、いや地球にも核を廃棄することが今日生きている人の責務と考えています。核が病気のために使われるのであれば私は何も言いません。戦争の武器に核を使うことは絶対に許せません。

\* \* \*

皆さんの今後の七十年が、幸せな平和な世界を作り出していくことを期待してやまない。

「平和の語り部」鈴木さんのお話を聴いて

一年 江尻 ひなの

私は、戦争体験のお話を聴いて、戦争をしないという選択はなかったのかな、と思いました。今から約七十年前、私は何も分らないし、生まれてもない時代。その時と今はだいぶ物や建物などが違います、人は同じ人間。もしも、今から戦争が始まったら、私は死から逃げる事ができないと思います。七十年前と同じで、死者を減らすことはできないと思います。もしも大都市に原爆が落ちたら、その現場にいて、生きることが絶対にできないと思います。まず、何も悪くない人達の命をうばわないでほしいと思いました。

鈴木さんの原爆が落ちた後の想像ができないお話は、とても印象に残りました。一生忘れないお話でした。強い光、爆風、想像ができませんでした。真夏の八月になぜ、こんな事が起きてしまったのだろうと思いました。私が聞いた中で、一番忘れられないお話は、目の前に住んでいたおばさんのお話です。お世話になっていた人を必ず助けたいのはきつとみんな思うはずです。私もしそのような状態だったら、助けたくても助けられないのが本当に苦しくて、何も行動できないと思いました。だけど、おばさんの手をがんばって

引っぱっていた鈴木さんも素晴らしいと思います。その勇気はすごいです。色々なお話を聞いて、これからにつなげていきたいと思いました。そして、勉強になるお話ありがとうございました。

「平和の語り部」鈴木さんのお話を聴いて

一年 大平 知雅

小学校二年生、まだ低学年で色々な経験をほんの少ししかしていない時期に原爆体験をしたことは本当に大変だと思いました。それより、たぶん家族みんなが助かるか心配だったんじゃないかと原爆体験のお話をしている時思いました。私は戦争を乗りきろうと色々頑張る力があつたことで家族の絆が深まったと思います。母を助けたり父との会話など一つ一つの場面で人とのつながりが多く出たのでやっぱり家族はいいものなんだと感じました。話の中には感情的になる部分もあり、その時、始めに話をしていて日本が事の始まりを起こしたんだという一つのことが頭をよぎりました。苦しい体験をしたことはありませんが、自分の近くの人間が倒れていったり、亡くなったりする中でこの全部の始まりが日本なんだと私が考えても、本当に何を考えていいのか分からなくなります。鈴木容子さんが今回、自分たちの目の前で話を語ってくれたことにとっても感謝しています。ありがとうございます。目の前で鈴木さんの表情が見えることによつて、原爆の本当のおそろしさが分かりました。私はこのような体験をしたくない、起きてほしくないと心の底から思いました。

「平和の語り部」鈴木さんのお話を聴いて

一年 望月 結海

僕は、鈴木さんのお話を聞いて、まず、戦争は絶対にしてはいけないものなんだと、改めて感じました。戦争をしても、だれも得をしない。ただ人が悲しむだけなので、する意味がないと思います。鈴木さんの話はリアルで、とても恐ろしいお話でした。僕のおじいちゃん、おばあちゃんも戦争が終わってから生まれたので、あまり身近に戦争を感じる機会がなかったので、鈴木さんの話を聞いた時は正直「ゾッ」としました。今の世の中は、すりむいたり、打ぼくをしたりただけで、大事のようになり、痛く、ましてや血が出たらもう死ぬかもしれない。そう思います。鈴木さんの話にあつた方たちを想像できません。そして、最も鈴木さんのお話の中で残忍だったのは、原爆で命を落としてしまった人たちや、まだかすかに生きている人たちを、日本兵が山のように積み上げて、ガソリンをかけ、燃やしたという事です。同じ人で、しかも同じ日本人なのによくそんな事ができるなと思います。僕は鈴木さんのお話を思い出すだけで心が痛むのに、実際に体験した鈴木さんはもっと、もっと痛むと思うのに、わざわざ学校に来て話して下さい、ありがとうございます。

## 第八中学校 実施概要

- 1 実施日 平成二十七年十二月十二日(土)
- 2 対象 全校
- 3 語り部 森 正幸 氏(中野区原爆被害者の会)
- 4 テーマ 広島の前爆投下後の様子



## 第八中学校 語り部からのお話

長広会の名前は、長崎の長と広島の前を組み合わせると長広会としたものである。

結成五十七年になる。現在の会員数は約百三十名、そのうち連絡のとれている方は半数、あとの半数の方は消息不明である。おそらく寝たきりか、施設に入っておられるものと推測している。なお、東京都の前爆者は、約六千人、平均年齢は八十歳である。

前爆当時の私は、中学二年、今の皆様と同じ歳だった。一年の三学期末から、学年五クラスのうち、私たちのクラスだけが、軍事工場に動員させられた。軍事工場とは、戦争のための兵器を造る工場のこと、私は、旋盤という金属を削る機械の部門に配属され、毎日人間魚雷の部品である蝶ネジを切っていた。

私は、七月上旬急性肺炎に罹ったが薬はない。治るか治らないかは本人の回復次第であるということで、ひたすら安静にしていた。心配した母親は、何か薬にするものはないか、とあちこち聞いてまわり、良いと言われることは何でも試してみた。それで、薬の代りに鯉の生血とか、ミミズの煎じ汁を飲まされた。そういうものが効いたと思わないが、何とか奇跡的に回復し、八月からは工場に戻ることになっていた。ところが、母親の勘で、十日間延長の診断書を医者からもらってきたことにより、直接前爆は免れることができた。実家は広島の前方の十キロ、宮島との中間の廿日市という町にあ

った。当日は、台所でジャガイモの皮を剥いていた。突然ピカッと  
いう強烈な光と、続いてドカンという大爆風が襲ってきた。家は、  
大地震にあった時のようにグラグラと大揺れし、天井からゴミがパ  
ラパラと降ってきた。近所に爆弾が落ちたと思いい、慌てて防空壕に  
飛び込んだ。当時は各家庭で防空壕をつくり、空襲に備えていた。  
しばらくして、恐る恐る這い出して二階に上がってみると、東側の  
窓ガラスがすべて吹っ飛んでいた。近くに爆弾が落ちた気配はない  
ので、今の大爆風はいったい何だったのだろうかと思いい、確かめるた  
めに屋根に登ってみた。すると、はるか東の広島の上空にきのこ型  
の雲がムクムクと湧き上がっていた。午前中に逃れてきた人は、「何  
かものすごい大爆発があり、広島は全滅です。」と言っていた。午後  
になると、被爆者がトラックで小学校に運ばれてきた。全身大火傷  
で、顔も腕も焼けただれ、皮膚はぶら下がっていた。その中の一人  
のひとは、板切れが目刺さったままで、その姿は今でも目に焼き  
付いている。その夜は一晚中、東の空は真っ赤だった。

この本は、二〇〇八年「長広会五十年のあゆみ」という証言集で  
ある。おそらく図書館にはあると思うので、興味がある方は、ご覧  
いただきたいと思う。

この中に私の原稿もあるので、今日はそれを読みたいと思う。

\*

\*

\*

『肺炎』の病欠の診断書を七月末から十日間延期してもらって  
いましたが、十一日からは出勤しなければならぬ。工場は恐らく全

焼しているだろうが、出勤はどうなるのか確認しなければならぬ。  
また、クラスの友人達もどうしているか消息も知りたかったので、  
八月七日朝早く宮島線廿日市駅から西広島に向かいました。井ノ口  
あたりから家の窓ガラスの壊れているのが目に付くようになり、古  
江・高須になるとほとんどの家屋が半壊の状態で、屋根瓦が吹き飛  
ばされたり、塀が倒れたりしていました。西広島駅の駅は爆風で壊さ  
れ、半壊状態でした。市内を見渡すと宇品方面に向けては形のある  
建物が見えず、江波の皿山が何の邪魔する物もなくはっきり見えて  
いました。この日も灼熱の太陽が容赦なく照りつけていました。

己斐の町はほとんどが半壊の状態や、大破して傾いたり土壁も落  
ちていました。己斐橋の近くになると大きな割烹旅館が焼け落ちて  
いました。己斐橋を渡り福島町に入ると無残に押しつぶされた瓦礫  
の山の一角が続き、その先は焼け跡でまだ熱気で熱く焼死者の真っ  
黒になった遺体もあちこちに見られました。

福島橋は焼け落ちて渡れなかったので、市内電車の鉄橋を渡りま  
した。下を見ると怖くて足がすくむので、ただひたすら枕木だけを  
見つめて渡りました。大人の人でも四つんばいで渡っている人もい  
ました。鉄橋を渡ると焼け跡を北上して中広町に向かいました。

電柱は倒れ、電線は垂れ下がり、道路には付近の家から飛び散つ  
た焼けた木切れやガラスの破片が道いっぱい散らばり、死体もゴ  
ロゴロと横たわっていました。散らばったトタン屋根の破片を集め、  
小屋のように立てかけて熱さを凌ぎながらその下でうめいているけ

が人の姿もありました。

動員先の石田兵器は全壊はしていましたが奇跡的に焼け残っていました。事務所の人らしい二人の人が肉親を探しにくる人たちに対応していました。クラスの友人達も下敷きになったのだろうと思っ  
ていたら、この日は土橋付近の建物疎開作業に行っていたので、恐らく全滅したのではないかということでした。

『助かったのは、事務所に残っていた網岡君、原野君、遅れてきて待機していた西崎君くらいではないか、土橋付近に行っていた五十数名のうちここへ帰ってきたのは十数名で全身火傷で顔の見分けができないため一人一人名前を聞いては荷札に書き、それをバンドに結びつけ、三滝の避難所に行ってもらったようにした。』

『先程も大江君のご両親が尋ねてこられたが、名前が無いので土橋方面に探しに行かれた。それにしても、あなたは運の強い子じゃねえ、頑張りんさいよ。』と激励されたが、五十数名の友人の悲惨な状況を聞いたあとでは怪我をしていないのが肩身の狭いような思いでした。『いずれにしても会社もこういう状態で再開の目途も立たない、あなた方は大変な目にあったんじゃやけえ自宅待機して、学校からの連絡を待つしかないじゃろうよ』ということでした。

土橋方面を確認しようと焼け跡のなかを広瀬橋まで来ましたが、橋は途中で落ちており、川の向こうは一面の焼け野原で、まだ、あちこちぶすぶす燻り、兩岸には死体が折り重なって浮いている状態だったので、ここから引き返すことにしました。

広瀬橋の手前から南下し、一番歩きやすい電車線路を通って、福島川の鉄橋に向かいました。途中、手や顔の皮はボロボロに垂れ下がり、顔を見ただけでは男か女か分からない重傷者が横たわっていたり、菰をかけてある死体もありました。福島川の鉄橋をもう一度渡り、己斐橋を経て西広島から廿日市に帰ったのはお昼過ぎでした。弁当は持っていたが、とても食べる気にはなりませんでした。

\* \* \*

以上が八月七日の私の状況である。私たちの学級は、建物疎開で爆心地から五、六百メートルのところをいたため、全員死亡した。建物疎開とは、火災の広がりを防ぐため、密集している建物を壊し空地を作ることである。原爆の悲劇はこうした直爆の被害だけではない。帰って来ない家族を探すために爆心地を歩き回った人達が次々と原爆症を起こして亡くなった。当時は放射能の知識がなく、爆発の後は安全で焼け跡は大丈夫だと思いついていた。どうしても体がだるくなったり、髪が抜けたり、歯茎から出血するのの原因が全く分からなかった。原因が分からないまま次々と人が死んでいくのはとても怖いことだった。何も知らないで放射能にさらされた被爆者の健康状態は最悪で、がんの発症率は通常の倍以上、それ以外にもたくさんの方が病気が次々に起こっている。

福島の原子炉事故で、四年経っても帰れない方が大勢いらっしやるのは放射能の怖さが分かったからである。目に見えない放射能は本当に怖いし簡単に消えないので、いつになったら帰れるのか皆さ

んが不安に思っておられることはよく分かる。

今年の四月、ニューヨークでNPTの大会があり核兵器の廃絶が叫ばれているが、現実には遅々として進んでいない。一日も早い核兵器のない世界を願ってやまない。

## 第八中学校 生徒の作文

### 森さんのお話を聞いて

二年 佐藤 愛権

今まで自分からはとても遠いもののように感じていた「戦争」が、今回、森さんのお話を聞いてとても身近に感じました。森さんのように原子爆弾を体験した人のお話を聞くのは実は少し怖い気がしていました。そう感じてしまったのは、私がどこか被爆者の方に偏見を抱いていたからかもしれません。でも実際に、森さんがお話をされる様子を見て、その気持ちたちが全くなくなり、むしろ感動に変わりました。私はお話を聞きながら、昨日まであった日常が一瞬にして変わり、当たり前になったものが無くなってしまったことの恐ろしさや辛さというものを想像していました。その出来事がいかに大変なことなのか、よく知らない私が勝手な思い込みや偏見を抱く権利はないと思いました。森さんは、思い出すのも辛く悲しいことのはずなのに、何度もその時の出来事を私たちに語ってくださいました。森さんはとても強い方なのだと本当に思いました。

私は、現在の平和や平等を当たり前と思わず、それを守るために自分にできることをやっていきたいと思いました。まずは自分たち一人一人が戦争や被爆についてよく知ることが大切だと思います。



そして間違った知識を持っていたら改める必要があります。昔あった事実をよく知り理解者となっていていろいろな人に伝えていくこと。そして、戦争で亡くなった人たちの分も自分たちがしっかりと生きていくことが大事だと思います。

### 森さんのお話を聞いて

三年 本郷 太朗

僕は小学校の時、図書館で広島原爆を背景にした物語である二つの作品、「はだしのゲン」と「黒い雨」を読んだことがあります。講話会で観た動画や森さんのお話の内容と自分の中で重なっていました。

僕は戦争の時代に生まれていないので本当の辛さを知りません。しかし、だからこそ、こうした過去の事実を忘れられてしまわないようにするべきだと思います。世界では今でも紛争が起こっています。あと一歩踏み出したら戦争になるような状況があると思います。でも、戦争の本当の怖さ、辛さ、恐ろしさを知っていれば、踏みとどまることができると思います。僕もつと戦争の事実を知り、その知識を深めていきたいと思いました。僕たちの世代に伝えてもらった事をとぎれさせてしまわないように、さらに次の世代、また次の世代へと伝えていくようにすることが大切だと思います。そして、どの世代も戦争の恐ろしさを心に刻み、平和な世界を築いていく努力を続けていくことがとても大切だと思います。

森さんのお話を聞いて

一年 宮崎 千波

私は小学生の時に戦争のことについて少し授業で学ぶことがありました。でも、その当時には平和の大切さを同時に考えることはなかったと思います。しかし、今回の講演を聴いて、改めて平和というものの大切さを知ることができたように思います。原子爆弾の被害にあうということだけでも大変なことなのに、それだけで終わらず、その後も被爆したということでは差別を受けたり、結婚をも断られたりしたなどの事実があったことを始めて知りました。今は平和な日本ですが、このような差別をしていた過去があったなんて、とても残念に思いました。この機会にたくさんのことをまた知ることができ、考えを改めることができました。これからもこうした講演を続けていって欲しいと思いました。

## 第十中学校 実施概要

- 1 実施日 平成二十七年六月二十六日(金)
- 2 対象 一年生
- 3 語り部 伊谷 富美子 氏(中野区赤十字奉仕団)
- 4 テーマ せまりくる火からの逃避(東京大空襲)



## 第十中学校 語り部からのお話

今年(昭和二十年)は戦後七十年の節目の年だが、本当に七十年も経ってしまったのかと思っている。

昭和二十年三月十日。当時私達家族は、荒川区に住んでいた。ちょうどその日は家において、夜、空襲警報が鳴り、電気を消してひっそりしていた。その日は、空襲警報が長く、異常な感じがしていた。誰もがすぐに逃げ出せる格好をして、荷物もすぐに持ち出せるようにしていた。いつ自分のところが狙われるのか、と心細い人ばかりだったと思う。幸い私のところは免れたが、被災された方はその土地にはいられないので、知り合いを頼っていた。父がそういう人から話を聞いたなら、誰もが皆怖くて逃げるしかなく、周りの人のことは考えられなかったと言っていたそうである。父は、「私たちのいる町も必ずやられる、そうしたら大変なことになるから。」と言って引越すことにした。当時、私の家族は両親と私(当時二十歳)、立川の飛行場で働いていた休暇中の妹、中学生の弟、そして末の妹(学童疎開に行っていた)の五人家族だった。

引越したのが五月二十四日。中野に住んでいたおじが東中野の近くに二階家を用意してくれ、やっと落ち着いたところだった。床について間もなく、空襲警報が鳴った。玄関を開けると、どんどん人がかけてきて、「逃げる、逃げる。」と言っていた。私たちは、引越してきたばかりで、右も左も分からなかったが、とにかく逃げ

なさいと言われ、荷物を持って、大勢の人に吸い込まれるように走っていった。どんどん先に進むことばかり考え、一生懸命走っていた。一晩中どこをどう走ったのか分からないが、やっと明け方に、公園のような場所へ着いた。そこでいくつかの家族が疲れ切ったという感じで休んでいた。後で聞いたら、そこは塔山小学校の校庭だった。私達も飯盒でご飯を炊いて少しずつ食べた。大きな風呂敷を敷いて荷物を置いて、やっと体がほぐれたような感じになった。母が、「あの中でよくこれだけの荷物が持てたわね」と笑った。父は大きなリュックと両手に食料品の包みを持っていた。母は仏壇の中身一式と軽いお菓子の袋を持っていた。妹や弟も学用品を大事そうに持っていた。

しばらくして、そこにいた方たちが焼け跡を見に行こうと言った。私達も荷物を持って、焼け跡の方へ歩いていった。当時はコンクリートの建物もなく言葉通りの焼け野原で、どこに何があったのか、全然分からなかった。通りを皆で歩いて、しばらく行くと、金物の棒が下がっているのが目に留まった。手に取ってみたら小さな刀だった。私の弟が小さい頃剣舞を習っていた時の刀ではないかと引き抜いてみたら、名前が入っていたので、ここが私たちの家だというのがやっと分かった。私達の家やその周りの家は、皆焼け落ちてしまった。火が出ると家が焼け落ちてしまうまであとという間だった。私達の日常生活まで戦争がやって来て、私達の幸せを燃やしてしまっているんだな、という感じがした。あまりの出来事に涙一つ出な

かった。

その夜、寝る場所を探すことになった。当時、田舎へ帰る人がいて空き家があったため、一つの空き家に何人かの家族が入り、それぞれの部屋を使った。夜、休むことにしたが、その日も空襲警報が鳴った。「この辺も危ないから逃げた方がいいですよ。」と言う人がいた。私達は持ってきた荷物を背負い、すぐ前が中井駅のホームだったので、何家族かでそこに腰をかけた。

私達は一晩、中井駅のプラットホームで過ごし、次の日に過ごす場所を何家族かで探した。空いている家を誰に断るでもなく、知らないもの同士皆で過ごしましょうということになり、そこで休んでいた。田舎に帰る人もいたが、私達には田舎がなく、そこにいるしかなかった。「ここでお会いできたのは何かのめぐり合わせかもしれません。」と、優しい気持ちでお別れしたのを覚えている。

父が、「こんなに山の手がひどいなら、荒川区の方は大丈夫かもしれない。帰ろう。」と言った。見て来るから、と言って翌日おじと見に行った。私達は一縷の望みを抱いていたが、帰ってくる。「こちと同じだった。」と言った。本当にがっかりだった。

私達は何もなく残り、ただ一つ残ったのが、庭にあった大きな防空壕だけだった。コンクリートで固めてあったので、割れ目も入らずそっくり残っていた。中に食糧や衣類を入れてあるかなり大きい防空壕だったので、大変嬉しかった。空き家で過ごしている間に、知り合いから阿佐ヶ谷に家があるからそこへ行ったらどうかと言わ

れ、引越すことになった。

私たちの経験した苦しいことは最低のライン。もつともつと辛いことを経験している方がたくさんいる。再び戦争がないようにと願うばかりである。皆さんにお願いしたいのは、六月二十日頃から終戦の日位までの新聞をぜひ見て欲しい。戦後七十年ということ、新聞やテレビで特集をする。私はそうした記事をなるべく読むようにしている。来年もそういった記事が出ると思うので、こういう人たちもいたのだ、ということを知っていただけたらありがたい。

## 第十中学校 生徒の作文

### 「語り部教室」を体験

一年 池野 龍紀

ぼくは、今日の授業を体験して「東京大空襲」や戦争は本当に恐ろしいものということが分かりました。

だけど、はつきり言ってぼくは、講師の方が分かりやすく説明してくれても全く想像が付きませんでした。なぜかというところぼくは、戦争は、体験したことがない人がいくら話を聞いても、いくら本などで調べても実際は、想像したものよりもつとつとひどいものだと思います。

でもだからといって何も感じなかったわけではありません。戦争中の暮らしや、空襲といった言葉で、「大変だった。」「辛かった。」などでは表せるものではないと思いました。

ただ戦争や空襲以外でもう一つ驚いたことがありました。それは、講師の方の話に、塔山小学校が出ていたということです。塔山小学校はぼくの母校です。だから話の中に塔山小学校のことが出るなんて思ってもみませんでした。

でも、こんなに大変な戦争があり、しかも日本は、結果的に戦争に負けました。なのに今の日本はこんなに平和です。これはきつと

七十年前の人たちが戦争に負けてもくじけずあきらめなかったから  
です。

ぼくは、この昔の人たちに今の日本を築いてくれてありがとうございます  
感謝したいです。

## 「語り部教室」を体験して

一年 兼清 蓮

私は、今回の「語り部教室」を受け、改めて、戦争の恐ろしさを  
感じました。

私は、今まで二回、「戦争の恐ろしさ」を実際に体験した人から聞  
いたことがあります。一回目は、「原爆」を体験してきた兵士だった  
人の話。二回目は、実際に戦争で、地上戦を体験した兵士だった人  
の話。どちらも心を痛める、私達の想像では分からない程の話でし  
た。そして、今回、初めて兵士ではなく、市民の「空襲」について、  
聞きました。やはり、本に書いてある事よりも、心に響き、そして  
考えさせられる話でした。目の前で焼けていく、後ろからどんどん  
焼けていく事は、私達が想像している事よりもつらく、怖い事だっ  
たのでしよう。逃げる事だけを考え、逃げ切って帰れば、何も無い。  
体験していない人の想像なんて、実際よりもずっと軽く考えてしま  
うはずなのに、それでも考えるとゾツとしてしまいます。戦争は、  
たとえ何があっても、してはいけない。私も、そう思います。しか  
し、今、世界では、そこら中で戦争が起きてしまっています。そこ  
まで大きくはないですが、IS問題で、アメリカが空襲をした事だ  
って、ほんの数ヶ月前です。

この考えは、自分でもどうかと思いますが、戦争は、無くならな

いと、そう思います。しかし、世界から、戦争が無くならなくても、戦争を減らす事は、できない事はないと、思います。だから、戦争の恐ろしさを、伝えていって、日本は、自分たちから戦いに行くな、どもつてのほか、できれば、もう戦争をしなればいいな、とただの願望ですが、そう思います。

## 火が追ってくる

一年 佐藤 綺音

「逃げろ、火が追ってくる。」伊谷さんが何度も、言われたと言っていました。火に追われる。かなり想像しにくいです。火は、調理するときに使ったりとても便利だと思います。でも、実際は、火の使い方を誤ると、大変な事になります。今でも、火事で死んでしまう人がいると思います。でも、追ってはきません。走っても、走っても：考えただけで本当にただただ恐ろしいです。その場に立ちあわせることが無くてよかったと思う反面、結局今は平和なのかと疑問に思います。

確かに今は、食などにめぐまれていて、過ごしやすいと思います。でも、一つだけ変わっていない所とひどくなっていることがあると思います。変わっていない所は、人が人を殺すという所です。ニュースなどで、殺人事件などをよく耳にします。いつだれが殺されるか分からないと言ったら分からないと思います。戦争は無くなっても、「殺」、このキーワードは無くなっていないと思います。

ひどくなっている所は、人の心です。伊谷さんは、みんな優しい気持ちだったと言っていました。今はどうでしょう。いじめやいたずら、くだらないことばかりを考えている人もたくさんいると思います。こんな人達がたくさんいる中で平和と言えるのでしょうか。

## 北中野中学校 実施概要

- 1 実施日 平成二十七年七月十一日（土）
- 2 対象 全校
- 3 語り部 森 正幸 氏（中野区原爆被害者の会）
- 4 テーマ 広島の前爆投下後の様子



## 北中野中学校 語り部からのお話

長広会の名前は、長崎の長と広島の前を組み合わせる長広会としたものである。

結成五十七年になる。現在の会員数は約百三十名、そのうち連絡のとれている方は半数、あとの半数の方は消息不明である。おそらく寝たきりか、施設に入っておられるものと推測している。なお、東京都の前爆者は、約六千人、平均年齢は八十歳である。

被爆当時の私は、中学二年、今の皆様と同じ歳だった。一年の三学期末から、学年五クラスのうち、私たちのクラスだけが、軍事工場に動員させられた。軍事工場とは、戦争のための兵器を造る工場のこと、私は、旋盤という金属を削る機械の部門に配属され、毎日人間魚雷の部品である蝶ネジを切っていた。

私は、七月上旬急性肺炎に罹ったが薬はない。治るか治らないかは本人の回復次第であるということで、ひたすら安静にしていた。心配した母親は、何か薬にするものはないか、とあちこち聞いてまわり、良いと言われることは何でも試してみた。それで、薬の代りに鯉の生血とか、ミミズの煎じ汁を飲まされた。そういうものが効いたと思わないが、何とか奇跡的に回復し、八月からは工場に戻るようになった。ところが、母親の勘で、十日間延長の診断書を医者からもらったことにより、直接被爆は免れることができた。実家は広島の前方の十キロ、宮島との中間の廿日市という町にあ



った。当日は、台所でジャガイモの皮を剥いていた。突然ピカッと  
いう強烈な光と、続いてドカンという大爆風が襲ってきた。家は、  
大地震にあった時のようにグラグラと大揺れし、天井からゴミがパ  
ラパラと降ってきた。近所に爆弾が落ちたと思い、慌てて防空壕に  
飛び込んだ。当時は各家庭で防空壕をつくり、空襲に備えていた。  
しばらくして、恐る恐る這い出して二階に上がってみると、東側の  
窓ガラスがすべて吹っ飛んでいた。近くに爆弾が落ちた気配はない  
ので、今の爆風はいったい何だったのだろうと思ひ、確かめるた  
めに屋根に登ってみた。すると、はるか東の広島の上空にきのこ型  
の雲がムクムクと湧き上がっていた。午前中に逃れてきた人は、「何  
かものすごい大爆発があり、広島は全滅です。」と言っていた。午後  
になると、被爆者がトラックで小学校に運ばれてきた。全身大火傷  
で、顔も腕も焼けただれ、皮膚はぶら下がっていた。その中の一人  
のひとは、板切れが目刺さったままで、その姿は今でも目に焼き  
付いている。その夜は一晚中、東の空は真っ赤だった。

この本は、二〇〇八年「長広会五十年のあゆみ」という証言集で  
ある。おそらく図書館にはあると思うので、興味がある方は、ご覧  
いただきたいと思う。

この中に私の原稿もあるので、今日はそれを読みたいと思う。

\* \* \*

『肺炎』の病欠の診断書を七月末から十日間延期してもらって  
いましたが、十一日からは出勤しなければならぬ。工場は恐らく全

焼しているだろうが、出勤はどうなるのか確認しなければならない。  
また、クラスの友人達もどうしているか消息も知りたかったので、  
八月七日朝早く宮島線廿日市駅から西広島に向かいました。井ノ口  
あたりから家の窓ガラスの壊れているのが目に付くようになり、古  
江・高須になるとほとんどの家屋が半壊の状態で、屋根瓦が吹き飛  
ばされたり、塀が倒れたりしていました。西広島の駅は爆風で壊さ  
れ、半壊状態でした。市内を見渡すと宇品方面に向けては形のある  
建物は見え、江波の皿山が何の邪魔する物もなくはっきり見えて  
いました。この日も灼熱の太陽が容赦なく照りつけていました。

己斐の町はほとんどが半壊の状態や、大破して傾いたり土壁も落  
ちていました。己斐橋の近くになると大きな割烹旅館が焼け落ちて  
いました。己斐橋を渡り福島町に入ると無残に押しつぶされた瓦礫  
の山の一角が続き、その先は焼け跡でまだ熱気で熱く焼死者の真つ  
黒になった遺体もあちこちに見られました。

福島橋は焼け落ちて渡れなかったので、市内電車の鉄橋を渡りま  
した。下を見ると怖くて足がすくむので、ただひたすら枕木だけを  
見つめて渡りました。大人の人でも四つんばいで渡っている人もい  
ました。鉄橋を渡ると焼け跡を北上して中広町に向かいました。

電柱は倒れ、電線は垂れ下がり、道路には付近の家から飛び散つ  
た焼けた木切れやガラスの破片が道いっぱい散らばり、死体もゴ  
ロゴロと横たわっていました。散らばったトタン屋根の破片を集め、  
小屋のように立てかけて熱さを凌ぎながらその下でうめいているけ

が人の姿もありました。

動員先の石田兵器は全壊はしていましたが奇跡的に焼け残っていました。事務所の人らしい二人の人が肉親を探しにくる人たちに対応していました。クラスの友人達も下敷きになったのだらうと思っ  
ていたら、この日は土橋付近の建物疎開作業に行っていたので、恐らく全滅したのではないかとということでした。

『助かったのは、事務所に残っていた網岡君、原野君、遅れてきて待機していた西崎君くらいではないか、土橋付近に行っていた五十数名のうちここへ帰ってきたのは十数名で全身火傷で顔の見分けができないため一人一人名前を聞いては荷札に書き、それをバンドに結びつけ、三滝の避難所に行ってもらうようにした。』

『先程も大江君のご両親が尋ねてこられたが、名前が無いので土橋方面に探しに行かれた。それにしても、あなたは運の強い子じゃねえ、頑張りんさいよ。』と激励されたが、五十数名の友人の悲惨な状況を聞いたあとでは怪我をしていないのが肩身の狭いような思いでした。『いずれにしても会社もこういう状態で再開の目途も立たんし、あんた方は大変な目にあったんじゃけえ自宅待機して、学校からの連絡を待つしかないじゃろうよ』ということでした。

土橋方面を確認しようと焼け跡のなかを広瀬橋まで来ましたが、橋は途中で落ちており、川の向こうは一面の焼け野原で、まだ、あちこちぶすぶす燻り、兩岸には死体が折り重なって浮いている状態だったので、ここから引き返すことにしました。

広瀬橋の手前から南下し、一番歩きやすい電車線路を通って、福島川の鉄橋に向かいました。途中、手や顔の皮はボロボロに垂れ下がり、顔を見ただけでは男か女か分からない重傷者が横たわっていたり、菰のかけである死体もありました。福島川の鉄橋をもう一度渡り、己斐橋を経て西広島から廿日市に帰ったのはお昼過ぎでした。弁当は持っていたが、とても食べる気にはなりませんでした。

\* \* \*

以上が八月七日の私の状況である。私たちの学級は、建物疎開で爆心地から五、六百メートルのところをいたため、全員死亡した。建物疎開とは、火災の広がりを防ぐため、密集している建物を壊し空地を作ることである。原爆の悲劇はこうした直爆の被害だけではない。帰って来ない家族を探すために爆心地を歩き回った人達が次々と原爆症を起こして亡くなった。当時は放射能の知識がなく、爆発の後は安全で焼け跡は大丈夫だと思いついていた。どうして体がだるくなったり、髪が抜けたり、歯茎から出血するのか原因が全く分からなかった。原因が分からないまま次々と人が死んでいくのはとても怖いことだった。何も知らないで放射能にさらされた被爆者の健康状態は最悪で、がんの発症率は通常の倍以上、それ以外にもたくさん病気が次々に起こっている。

福島原子炉事故で、四年経っても帰れない方が大勢いらつしやるのは放射能の怖さが分かったからである。目に見えない放射能は本当に怖いし簡単に消えないので、いつになったら帰れるのか皆さ

んが不安に思っておられることはよく分かる。

今年の四月、ニューヨークでNPTの大会があり核兵器の廃絶が叫ばれているが、現実には遅々として進んでいない。一日も早い核兵器のない世界を願ってやまない。

北中野中学校 生徒の作文

戦争・原爆を無くすために

一年 大野 由莉子

今日、森さんがお話しして下さったのが、原爆の落とされた中心地に最も近い方のお話でした。

私は以前、祖父から戦争についての話を聞いていました。「家の屋根に上っていたら、敵の飛行機が上を通っていったんだ。」生憎、祖父は東京育ち、祖母は戦後生まれだったので原爆の詳しいことは聞くことができませんでした。

最近、といっても一年は前ですが、原爆について、戦争について学びました。最初は、ただ単に「怖い」としか思っていませんでした。なぜかという、それで大勢の方が亡くなるからです。

しかし、今日の話聞き、もっと戦争、原爆のおそろしさを知りました。原爆は、その時だけに被害があるのではない。後に、後遺症を負うことになるかもしれない。助かっても、そこで終わりじゃないこの戦争、原爆のおそろしさが痛いほど伝わりました。

もちろん、全てを知りきったわけではありません。これから、もっと戦争、原爆のことを知って、この怖さを次の世代の人や、海外の人たちにも広めてゆき、全ての国の人たちに、戦争反対の意見を

持つてほしいです。

被爆体験を聞いて

私たちに原爆の「怖さ」「存在が許されないこと。」そして、「こんなに恐ろしいものが、まだ完璧になくなったとは言えないこと。」を

二年 佐藤 英紀

伝えていただき、ありがとうございました。

原爆で亡くなってしまった罪のない方々のためにも、どうか戦争はやめてほしいです。

わざわざ原稿にまとめ、朗読して下さいました森さん、本当に感謝しています。

今年には戦後七十年という節目の年です。戦争では辛い思いをした方がたくさんいらっしゃいました。しかし、七十年という月日が経ち、そんな辛いお話を私たち戦争を全く知らない世代に伝えてくださる方がいらっしやらなくなってきています。今日お話をしてくださった森さんのいらっしやる中野区原爆被害者の会の皆さんの平均年齢は八十歳だそうです。なので、この道徳の授業を大切に受けなければと思いました。

森さんが原爆にあつてしまったのは、中学二年生の時、クラスの仲間と人間魚雷の一部となるネジを作っていた時だそうです。ただ森さんは肺炎になってしまつていたため八月六日の朝は自宅にいらしたそうです。ピカッと外が光りドーンと大爆風の音がして家はグラグラと揺れて、東側を向いていたガラス窓は全部割れたそうです。屋根に上つて東を見ると、あのキノコ雲が見えたそうです。

八月七日、森さんは仲間が心配になり、工場を見に行ったそうです。行く途中には全身黒こげとなったご遺体、お顔を見ただけでは性別も分からないほどのやけどを負つた方、目に板が刺さつた状態のままの方、今でも忘れられない光景を目にされたそうです。工場に着いてから仲間はほとんど亡くなつたという悲しい報告も聞き、

工場の方には、「君は本当に運の良い子だね。これから先、しっかりと生きなさい。」と言われたそうです。子どもの安否が分からず、ご両親で工場に来た方もいたそうです。

三年 塩崎 雄大

今回は、自分では想像のつかない話ばかりで、すごく怖かったです。これからは、八月六日、八月九日、終戦の日には、戦争で亡くなられた方を祈ると共に、戦争の辛い体験をした方々が、安心して過ごしていけるためにはどうすればいいかを考えていきたいと思いません。

### 被爆体験者の方の話を聞いて

「原爆は恐ろしい。」このことを、ぼくは十五年生きてきたなかで、何度も耳にし、そして学んできました。しかし、テレビで原爆について取りあげていても、「はだしのゲン」という漫画を読んでもあまり興味が湧かず、また、広島の中学生のスピーチを聞いても、自分とはそこまで関係ないと思っていた。しかし、今回被爆体験者の方の話を聞いて、「自分たちがこのような話を次の世代に受け継いでいかなければならない。」と強く感じた。

被爆体験者の森さんの話で印象に残ったのは、「自分だけが生きていいのだろうか、と申し訳ない気持ちになった。」ということ。森さんが病気にかかって仕事を一週間家で休んでいたときに原爆が落ち、同じ工場の仲間ほとんど死んでしまったらしい。生きていくことを、「申し訳ない。」なんて思ってしまうような世の中にしてはいけないと思う。

「私たち長広会（長崎の「長」と広島「広」から名づけた）のメンバーは、この世から核がなくなすることを願っている。」最後に森さんは、こう締めくくった。

「歴史は繰り返す。」以前、この言葉を社会の先生から聞いた。今年で戦後七十周年。年が経つにつれ、実際に被爆者の方から直接、

今回のような話を聞くことはできなくなる。ぼくたちは今回、貴重な体験をさせてもらった。だからこそ、ぼくたちが今回聞いた話を次の世代に受け継いでいかなければならない。絶対に。二度と同じ歴史を繰り返さないために。

## 緑野中学校 実施概要

- 1 実施日 平成二十七年九月十二日（土）
- 2 対象 二年生
- 3 語り部 鈴木 容子 氏（中野区原爆被害者の会）
- 4 テーマ 広島原爆投下後の様子



## 緑野中学校 語り部からのお話

七十年前、私は小学校三年生だった。当時は戦争の真っ只中で、終わりに近い状態。空襲警報発令のサイレンが鳴ると同時に防空壕に入らなくてはならなかった。サイレンが鳴ると、皆走って死にも狂いで防空壕に入り込む。ところが防空壕が狭いので、そこに全校生徒が入ると息苦しく重くなってはならない。空襲警報が解除されるまでその中にいなくてはならず、何百人が狭い防空壕の中に入り、爆弾が落ちないことを願いながら、真っ暗な中にじっとしていなくてはならなかった。解除されてやっと勉強ができると思いに座った途端にまた鳴る。苦痛だが、当時はそれが習慣になってしまい、だんだん慣れてくると最後には歩いて入るような始末だった。そのうち学校では勉強ができないということになり、集団疎開となった。その中に縁故疎開があり、自分の両親、親戚のふるさどがある人はそこに行ってもいいことになった。私は、縁故疎開で山口県に疎開することができた。毎日、知らない場所に一人だけという状況で、田舎の学校に行き、寂しい思いをしていた。

ところが、八月五日、原爆の前日、姉が広島へ戻っていらっしやいということを迎えにきた。自分の家に帰れる、親に会えるという嬉しくてたまらなかった。その日は和やかに過ごすことができ、自分の家はいいと思っていた。

翌日、八月六日。食事が終わり、兄二人は兵器造りに出かけるこ

とになっていた。上の兄は、本来は、兵隊になれるはずだったが、栄養失調のためなれないと言われ、飛行機の部品などの兵器造りを手伝うことになった。二番目の兄はまだ高校生だったので、兵隊の対象にはならず、勤労奉仕となり、それぞれが出かけて行った。父は延焼を防ぐために家を壊す作業に出かけていた。八時十五分、母は、屋根の上に植えていたトウガラシに水をやりにはしごで上がっていた。姉は二階で掃除をしていた。私は久しぶりに広島に帰ってきたから遊びに行こうと思い、出なかった。とたんに、ピカッと光った。光った瞬間は、目がくらくらつとして目の前が真っ白になった。その次にドーンという音がして壁にぶつかり脳震盪を起こしひっくり返ってしまった。どの位気を失っていたのか分からない。気が付いた時は、目の前に何も無く両腕にガラスの破片が突き刺さっていた。痛いとも感じなかった。恐ろしさで玄関の方に走っていき、見ると今まであった家が何もなくなっていた。

外では、人間ともつかない目は飛び出て両腕はない人達がぞろぞろ歩いている。腕のある人は、おぼけのように両手を上げて下げられない、痛いから手を振ることもできず手を上げたまま歩いていた。その方たちも、しばらく歩くとバツバタと倒れてしまい、そのまま息絶えてしまう。道路は死人でいっぱいだった。しかも尋常な死に方ではない。裸の方がほとんどで、男女の区別も分からず、皮膚が焼けてぶら下がっている。自分の肉体がはがれ、ぶら下がっていて、それを自分では洋服だと思っている。そういう方たちが、「熱い、

熱い。水、水を下さい。」と言ってぞろぞろ歩いていた。最初のうちは目を背けたくなかったが、人間は恐ろしいもので、これが延々と続くこと慣れてしまう。そして焼けたところへハエがたかり、卵を産み、時間が経たないうちにうじ虫が出てきた。

姉は幸い足をけがしただけで助かったが、母親はあごが外れ、胸を火傷していた。本当にこれが母親かという感じで恐ろしかった。母のために、水道管が破裂して水が出ているところへ、飯盒で水を汲みに行った。そこでは皆、水を飲み、水道管に張り付いていた。飯盒に入れた水を運んでいる途中、火傷をした人々が飯盒をめがけてやって来て、自分の体にかけてしまう。何回も何回も水を汲みに行ったが、母のところに持つていけたのは、何十回かに一回だった。急いで走っていくと水がこぼれ、着いた時には半分になっていた。それでも母は有難がって、水を飲んで、同じように体に水をかけた。私は何度もそこに通った。水道管から水が出なくなるまで皆、かじりついていたが、その内に、水が止まってしまった。

仕方がないので、川へ水を汲みに行ったら、人間が流れていた。水を求め、飲んで安心したら中に入っていくそのまま流されてしまう。安心して、気力体力がない状態。人間だけでなく、馬も流れていた。私は水をたつた一、二回、母に持つて行けただけで、水を取られ、悔しい思いをしたが、後日考えてみるとあの方たちも死にもの狂いだったのだと思う。

ただ、私がどうしても自分の手記に書けなかったことがある。水



を汲みにいった時に、「容子ちゃん、容子ちゃん、助けて。」と叫ぶ声が出た。見ると、私をかわいがってくれた近所のおばさんが、首と肩、両手が出ているだけで、生き埋めになっていた。側に寄り、腕を引っ張ると、出たように感じたが、そうではなく、腕がずる剥けになっただけだった。腕は火傷をしていたので、その皮膚が剥けてしまっただけで、九歳の力では、とても助けることができなかった。私の好きなかわいがってくれたおばちゃん。思い出が頭をよぎり、一生懸命引っ張ったがだめだった。そのうちに、火が後ろから上がったと思うと、辺りが火の海になった。「おばちゃん、ごめんね。」と何度も言っ、手を放して逃げてしまった。もっと大きかったら、力を出せたかもしれない。結局見殺しにしてしまった。それが忘れられない。亡くなる姿を見ながら、逃げていく自分の卑怯さ。たまらない。後日、あのおばちゃんがどうなったか聞いたら、その場所で骨になっていらしたということだった。とても悲しく、見殺しにしたという気持ちが忘れられなかった。以上が私の嫌な戦争の話である。

最後に、私が戦争に対して憤りを感じたことを書き残しているの  
で聞いていただきたい。

\*

\*

\*

沖縄にアメリカ軍が上陸した際すでに日本は敗戦していたはずで  
す。にもかかわらず、戦艦とかB 29を何機撃沈と報道され未だ日本  
が優勢に戦っているように、嘘の報道がされていた。あの時日本が

終戦を宣告されていたら、広島・長崎の悲劇は起こらなかったと考  
えています。そして日本もあの戦争の責任をアメリカとともに負う  
べきです。

そもそもあの戦争はどうして起きたのか。第二次世界大戦のこと  
を考えます。アメリカとイギリス対ドイツ、イタリア、日本。原因  
は何であったのか。そこまで追い込まれ、回避できなかった理由は  
何だったのでしょうか。そこまで追い込まれ、回避できない理由を知  
りたい。そして最後に原子爆弾を、戦争を終わらせるために落とし  
たと言っているアメリカの言い分、理解できません。地球上のあり  
とあらゆるものを破壊してしまう核はどんな理由を付けても扱って  
はいけないものです。核から得るものは何もないと考えています。  
特に学者の方に言いたい。あなた方がいたずらに核を研究して、得  
る物は悪魔の代物を作るものだ。将来の人々のため、いや地球に  
も今核を廃棄することが今日生きている人の責務と考えます。

どうぞ皆様がこれから社会に出て、家庭を持ち今後の、また七十  
年を考える時、戦争が起きないことを願います。

\*

\*

\*

あなた方が戦争を防がなくてはいけない。その責務を負って生き  
ていっていただきたいと思う。

心の傷

二年 越永 璃音

戦争とは恐ろしいものだ。私は小学校のころから、戦争についてそう教わってきた。しかしこの一言だけでは、どう恐ろしくて、何がダメなのかよく分からない。でも、今回鈴木さんの話を聞いて少しいだけ、その答えが分かったような気がした。

戦争で日本に原子爆弾が落とされたとき、鈴木さんは小学三年生だったそうだ。当時は、いつ原爆を落とされるか分からずとも、勉強もできないし、子どもは危ないので家族と離れ、たった一人で疎開したそうだ。しかし戦争の被害はそれだけではとどまらなかった。八月六日、原爆が落とされた。鈴木さん自身は無事だったもののお母さんは、あごが外れ胸を火傷してしまった。そんなお母さんのために鈴木さんは水道管が破裂して水が出ているところへ何度も通って家まで運んだのだ。きっとそのとき彼女はとても孤独で不安でどうしようもなく怖かったと思う。私もその気持ちはよく分かった。私が小学三年生だったとき、東日本大震災があった。そのときは丁度下校中で一人だったため、とても不安だったし、まず家族が心配になった。一人になってしまったらどうしよう。このまま一生

会えなくなってしまうたらどうしよう。考えれば考えるほど心が暗くなっていた。きっと鈴木さんも同じような気持ちを抱いていたと思う。いや、もっと複雑な気持ちだったかもしれない。

戦争は人間の体だけでなく心まで、容赦なく傷つけていく。また、その一回傷つけられた心は、その人自身を深く苦しめ、死ぬまで傷つけ続ける。しかし私達はまだその重大さに気が付いていない。二度と同じ過ちをくり返してはいけないと心の底から理解しなくてはならないのだ。

これからは戦争としつかり向き合い、小さなことでも、自分できてることを探していきたい。そしてそれを一早く実行に移していきたい。

## 原爆から教えてもらったこと

二年 佐々木 ひかる

この講演を聞くまでは原爆のこわさが想像もつきませんでした。ニュースでよく耳にはしていましたが原爆の本当のこわさは知りませんでした。しかし、この講演を聞いて原爆とは私の想像を超えるものでした。川に死体が何体もある、自分の目の前で何人もの人が亡くなっていくなど私には耐えられません。

そんな鈴木容子さんの体験を聞いて、一番聞いていて辛かったのは、近所がかわいがってくれたおばさんを助けてあげられなかったという話です。

助けてあげたかったけど、自分の力では何もすることができないからその場を離れた時のことを想像すると罪悪感でいっぱいだなと思いました。そして、その後のおばさんの状態は骨になっていたと聞いた時鈴木さんはどれだけ辛かっただろうなと思いました。私だったら自分が殺したと思ってしまう、自分を責めてしまいます。

戦争に何も関係していない人までこんなにも苦しむなんて、かわいそうだと思います。生き残った人達にもそれぞれが、そのあと辛い人生を送ったのだと聞いて、やはり原爆とはおそろしいものだと思います。

この講演を聞いて原爆についてよく分かりました。小さな子ども

からお年寄りまで犠牲になったり、後遺症で苦しんだりする人が多くいます。原爆は戦争を終わらせるだけではなく無差別な殺人兵器だと思いました。

これからの生活も過去にこのような出来事があったということを忘れずに生活していきたいと思います。

## 講演会の感想

二年 中國 史歩

今回、「平和の語り部」講演会で鈴木さんの貴重なお話が聞けました。私は、今普通に学校に行き、勉強して家族とも一緒に過ごしています。しかし、戦争のときは授業中にサイレンが鳴り、何百人が狭い防空壕に入っていたと聞き、驚きました。当時はそれが普通で生徒たちも授業の一環と思っていたかもしれません。私たちはそんなことには無縁で、もし今空襲警報が鳴ったらパニックになってしまうと思います。「うそだ」と思う人もいるかもしれませんが。私はそんな毎日を送りたくありません。

八月六日原爆投下の日。この時の鈴木さんの話を聞いて、私は気分が悪くなり聞いていられない気持ちでした。「お母さんやお父さん家族の皮膚が焼けてぶら下がっていたり、川には人の死体が流れていたりする。」一瞬の時間で何もかもがなくなってしまうなんて想像できません。私なら何も分からずただ見ているだけかもしれません。私が一番印象に残っているお話は、「自分をかわいがってくれていた近所のおばさんを見殺しにしました。」というお話です。生き埋めになっているおばさんの手を引っ張ると腕がずる剥けになってしまった。このようなことを聞き、まだ九歳だった鈴木さんが助けられなかったのは仕方がないと私は思いましたが、自分がお世話にな

っていた人を救えなかったということが今でも鈴木さんの中で後悔していることなんだと感じました。私なら気が狂ってしまうと思います。

私たちは戦争を知らない世代なので年上の方々からお話を聞くしかありません。原爆のことなどこれからずっと忘れないためにも次の世代に伝えるにはどうすればいいのか考えていきたいです。貴重なお話が聞けてよかったです。

南中野中学校 実施概要

- 1 実施日 平成二十七年五月二十一日(木)
- 2 対象 全校
- 3 語り部 鈴木 容子 氏(中野区原爆被害者の会)
- 4 テーマ 広島の前爆投下後の様子



南中野中学校 語り部からのお話

戦争は、私にとっては昨日のようなもので、未だに恐ろしさを忘れることはできない。あのような思いは二度としたくない。二度と起こらないでほしいと思う。

昭和二十年、私は小学校三年生で九才の時、夏休みになる前には、毎日が空襲警報で防空壕へ飛び込んでいた。授業を始めようとするときと空襲警報が鳴るといことが、毎日続き勉強にならなかつた。学校も戦争に巻き込まれた状態で、ほとんどの児童が疎開をしていた。本土決戦が目の前に迫り、日本は負けているが、まだいけると思い戦争をやめず、広島、長崎の悲劇が生まれた。

たった一発の爆弾で何万人もの人が焼け焦げ、悲惨な人間とはいえないような状態になってしまった。おばけではないかと思うくらい、恐ろしい人間の姿を見た。髪の毛は燃え、皮膚の皮がむけ、洋服が焼け、真っ裸になり、目玉が飛び出て、歩いて二、三步したら倒れてしまうような状態、そういう人が、道端に転がっていて、歩けない。けがはしなくても、多くの人が水を求め、火傷をした人は蛇口に口をつけて水を飲んでいて、蛇口にも列ができていた。

私の家の水道管は、破裂していなかったので、人々がやってきて水道に抱き着いて離れず、押しつけて「水、水」と叫んでいる状態だった。八月六日は暑い日で、火傷をしている人にとって熱風はたまらないほどだったが、水道は長くは続かなかつた。

広島には、七本の川があるが、皆水を求めて、川へ来た。母も、父も火傷をしていたので、私も飯盒に水を入れて運んだが、何度も何度も運ぶので悲嘆にくれていた。その途中、私の名前を呼ぶ声が聞こえ、見ると私をかわいがってくれたおばさんが、がれきの下に生き埋めになっていた。両手が出ていたが、ひっぱっても、当時九

二年 小林 彩夏

歳だった私に力はなく、腕の皮がずると剥けていき、ちっとも上がってこなかった。肩口くらいまで上がったところで、火が熱く感じ、これ以上手をひっぱる訳にもいかなかった。助けられなかったことを今でも悔やんでいる。私が九歳でなければ助けられた命。「ごめんなさい。」と言って逃げた。見殺しにしてしまったことを未だに忘れられず、手記にも書けない。

先日広島へ帰った。資料館に行き、当時のままの状態を再び目にするようになった。戦争ほど怖いものはない。皆さんは戦争にあわないで一生を終えられたら幸せだと思う。周りの国には、戦争を行う国もある。今の日本は、平和というが、いつ日本でテロが起こったり、恐ろしい核戦争に巻き込まれたりしてもおかしくない。日本人にとって核はいらないものである。

平和に過ごせる日本がこれからも長く続けばいいと思う。皆さんはいいことと悪いこと、道徳心を勉強してほしいと思う。

「平和の語り部」からのお話を聞いて

私はこの語り部の会で聞いた事にただただ恐怖と衝撃を覚えましたが。この話は聞かなければいけない。戦争、原爆の恐ろしさを分かってなければいけないと思いつつも心の底では聞きたくない、怖いと思ってしまうました。こんな事を書いてはいけないと思いますが今、戦争がなくてよかったです。自分がこんな事になっていなくてよかったですと本当に思いました。

鈴木さんがお話してくださった事は全て衝撃的でしたが一番衝撃的だったのは、小さい頃からお世話になっていたおばさんを見殺しにしなければいけないということ。手をつかみひっぱり出そうとすると手の皮がむけ小学二年生という幼い子供の力では助けあげられなかったというのは本当に怖くて悲しい事だったと思います。そしてこの事だけは本には書けない。私がもう少し大きければ助けてあげられたという鈴木さんの言葉、そして流された涙は鈴木さんがたったの九歳という年齢で背負わなければいけなかった事の重さ、苦しさが表れているのだなと思います。他にもやけどにあった人は自分が服を着ていないという事、手やうでからぶら下がっ

ているのは自分の皮ではなく服だと思っていてわからないというお話にも衝撃を受けました。最後の質問の時に戦争末期食料はどうしていたのかというのに鈴木さんがいもなどを食べていた。と言って私の祖父がいもが嫌いと言っていたのを思い出しました。祖父がいもが嫌いな理由、それは戦争でいもしかなくずっと食べていたからです。祖父はいもを見ると戦争の事を思い出して嫌と言います。

私はこんな事があつては本当にいけないと思います。太平洋戦争の時は日本がまいてしまった種。私たちが大人になったら絶対そんな事はしない。させないと心に誓ってこれからの人生を生きていきたいと強く思いました。

## 「平和の語り部」からのお話を聞いて

一年 高石 真行

平和の語り部の被爆者の方のお話で、僕は原子爆弾以前の問題で、なぜ戦争をしてしまうのかと思いました。戦争が起きてしまったから原子爆弾が広島、長崎に落とされたのであって、戦争さえなければそんなことは起きなかったはずだからです。また、戦争をしかけてしまったのは日本であつてやってしまったら、やり返されるといふことは、わかつていたはずだから、原子爆弾投下はアメリカだけではなく、日本にも意地を通して、こうふくしなかった責任があると思いました。

それによって八月六日、何の罪もない方々が、原子爆弾のせいになつてしまわれたのは、本当に残念で、かつ理不尽だと思いました。被爆者の人は、話の途中で、人を一人見殺しにしてしまったと言っていました。その状況を作り出してしまったのも日本自身です。また、話の中で、原子爆弾の被害について、話をされていた時も、僕には想像できないようなとても残こくなお話でつい、その時に生まれなくてよかつたと思つてしまいました。原子爆弾で亡くなつてしまった人々のことを考えると、とても胸が痛くなります。

そして、戦争が終わり、現在の日本は、自分達が受けた原子爆弾

「平和の語り部」からのお話を聞いて

二年 村山 美月

の苦しみを最も知っているからこそ、他国に、核兵器をやめろという呼びかけをしています。しかし、いくら日本が頑張ったところで、核兵器のい力を知ってしまった他国は国を守るという大義名分のもと、核兵器を手ばなそうとしません。だから、僕は、世界の国々が、核兵器を持たず、戦争もしない、平和な世の中になってほしいと心から思います。

「ノーモア広島」

「ノーモア長崎」

私は、今回の講演で知らなかったことをたくさん知ることができました。私は鈴木さんの話の中で出た「見殺しにしてしまった。」「あの時自分をもっと大きかったらきつとあのおばさんを助けることができたのに。」という言葉聞き、原爆の怖さを強く感じました。生き埋めにされている人をがんばって引つ張って助け出そうとしても皮ふがずるとはがれて助けたいのに助けることができない、大きなやけどを負った人はうでとわきがすれないようにゆうれいのように手を前に出して歩いていて、中には目が飛び出ている人もいます。このような話を聞いて私は本当にそのようなことがあったのかと、とても不思議にそして私が今のような平和な時代に生まれてこれたことの幸せを感じました。また、うじ虫の話がとても印象に残っています。ひとつひとつ取り除く度に人の肉までついてきてしまう。その話を聞いて、卵を産みつけられた人もとても辛い思いをした方もいると思いますが、うじ虫を取り除いている人もとても辛かったのだらうなと思いました。私が鈴木さんに質問した、「当時の人々の戦争に対しての思いはどのようなものでしたか。」の答えが、みんな戦争は早く終わって欲しいと願っていたということ聞いて、なんの関係の無い人達まで巻き込まれなくてはいけなかったのだらうと



強く思いました。また、日本は負けているにも関わらず、負けを認めなかったから広島に原爆が落とされてしまったという話もしていただいて、なんで日本はそんなに頑固だったのだろうと不思議に思いました。

私は、話を聞いて二度とこのようなことは起こってはいけないと思いました。今、日本は外国と比べたら平和かもしれないけれど、いつなにか起こるか分かりません。だからといって私には何もすることができません。けれど今、この平和な日常をただ適当に過ごすのではなく、平和に毎日生きていけることに感謝して過ごしていこうと思います。それが今私にできることだと思います。

## 中野中学校 実施概要

- 1 実施日 平成二十七年七月十一日（土）
- 2 対象 全校
- 3 語り部 山田 玲子 氏（東京都原爆被害者の会）
- 4 テーマ 広島の前爆投下後の様子



## 中野中学校 語り部からのお話

私は、広島市己斐町で生まれ、小学校五年生の時に被爆した。

私が小学校に入った時、尋常小学校が国民学校になった。二年生になるとシンガポールを陥落させたお祝いに粗末なボールが配られた。三年生になるとだんだん食べ物なくなり、四年生になると近所の若い男の人が毎日のように戦場に送り出された。五年生になると集団疎開が始まり、第一次で疎開をする子どもたちは、四月に学校を出発することになっていたが、私は末っ子で父が離したくないと言うので見送った。

私は六人家族で、両親と三人の姉がいた。すぐ上の姉は女学校の一年生で、建物疎開で出た材木の片付けに動員されていたが、八月六日は病気で休み命拾いをした。その上の女学校四年生の姉は、少し離れた郊外で、軍人が着る洋服の工場へ当番制で出かけていた。一番上の姉は、広島駅から少し離れた製鉄所や兵器を造る工場へ毎日働きに行っていた。父は、在郷軍人で空になった学校で、戦場へ行く若い兵隊たちと共同で訓練をして暮らしていた。母は、当番制で中学生たちが行っている建物の片付けに動員されていた。みんな戦争に協力させられており、勉強はできなかった。

一次で疎開をしなかった子どもたちは、強制的に集団疎開をするため、八月九日に出発することになっており、八月六日は、校長先生の最後のお話を聞くため校庭に集まることになっていた。私は八

時に学校の校庭にいた。

小学校では、校庭で整列をして校長先生の話が始まったが、あまりの暑さに木陰で休むことになった。友達と腰を下ろしたところで、運動場にいた男の子が突然「B 29だ！」と空を指差した。眺めた瞬間、ものすごい光が光り、背中に砂場の砂が吹付け転んでしまった。

私たちは、運動場にある防空壕へ走ったが、ここは危ないというので、裏門を出たところにある別の防空壕へ向かった。ところが近所の人たちでいっぱい、入ることができなかった。その頃には、頭の上まで黒い雲が来て、雨がざーっと降り私たちはびしょ濡れになった。それが後でいう黒い雨だったが、その時は、黒い雨なんて誰も思っていなかった。一人の男の子が、「大変だ。あれを見て。」と学校の方を指差すと、学校へ向かって、けがをした人、黒ずんだ人、いろんな人が走ってきた。それをみた途端、私たちは自分の家のことを思い出した。

家は、天井が落ちガラクタのようになっていた。母と姉が下敷きになっているに違いないと思いだ泣きをした。すると隣のおじさんが来て、母たちは安全なところへ行き、私を迎えに戻ってくることを教えてくれた。待っていると、母がものすごい勢いで私を探しに帰ってきた。二人で抱き着いて泣いていたら、今度は隣の人が走ってきて、父が帰ってくることを教えてくれた。父は、二人の若い兵隊に助けられガラスの破片で血みどろで帰ってきた。公民館にいた若い兵隊が飛んできて、父の軍服を全部はさみで脱がし、布きれで巻

いてくれたが、後から後から出て来る血で、その布が染まっていた。

母は、私が心配なので私を山の中腹にある叔母の家に連れて行くことにしたが、その時は主だった道路には歩くことができないくらい逃げている人や寝転んでいる人、しゃがみこんでいる人、水を下さいと呻いている人たちでいっぱいだった。

母は、八日になって私とすぐ上の姉に、家に必要なものを取りに行ってくるようにメモを渡した。道路に出ると、全く歩くことができない位、倒れた人が重なり合って、みんな虫の息だった。その真ん中をかるうじて歩いていると、黒い斜めに傾いた人が立っていた。気持ちが悪いので、避けて通ったら、その人は小さな声で姉の名前を呼んだ。びっくりして振り向いたが、火傷で顔がどうなっているのか分からず、姉は怖くて逃げた。私も必死になって逃げた。家族には、誰にもそのことを言わなかった。

次の日に、また母に家に必要なものを取りに行くよう頼まれた。しかし、道路を見ると重なっていた多くの人々の姿がなかった。私たちの学校の前に行くと、黒い煙が上がり、ものすごい臭いがした。学校の外には、山のように死体が積み燃やされるのを待っている状態だった。私も姉もその日から、その人の名前をなぜ聞いてあげなかったのか、家族が迎えにくるのを待っていたのに違いないのに、名前くらい聞いてあげればよかったと子ども心に鳥肌が立った。

八月十五日になり、第二次集団疎開の予定の人は出発することになった。お昼頃に田舎の駅に着くと、先生が日本は戦争に負けたと

言った。しかし、戦争に負けたということが分からなかった。戦時中、大人に向かって、嫌だとかどうして、とは言えず、悲しくてもじっと我慢してきたので、誰も先生に聞けなかった。一ヶ月疎開していたが、食べる物はなく、麦とたくあんだけだった。一ヶ月が経ち広島へ帰ることになったが、誰一人喜ぶ人はいなかった。

家に帰ると、窓ガラスには板が貼ってあるだけで、ガラスはなく、雨が降れば雨漏りだった。私がいつも遊びに行っていた家に行こうとすると、母が呼び止めた。その家は、子どもたち五人がお母さんが帰るのを今か今かと待っている、真っ黒い四つん這いのものが、すごい勢いで家の中に入ってきたので、黒い犬かと思った。よく見るとお母さんで、そのまま息を引き取ったという話だった。また、その隣の家には、すぐ上の姉の同級生がいたが、帰って来ないので、今でもお母さんがお弁当を持って市内を探し回っていると聞いた。私は、玄関を出たところじゃがみ込み、その時初めて戦争ってこんなものだったのか、本当に悲しい無残なものだと思いが止まらなかった。

六年生の四月になり、運動場にさつまいもの苗を植えた。収穫の時に皆掘るものを用意して楽しみにしていたが、掘り始めるとあちこちで悲鳴が上がった。白骨が出てきたと大騒ぎになり、私たちは誰一人食べることができなかった。

校庭では、二千三百人以上の方を茶毘に付した。その方たちは、名前を聞かれることもなく迎えにきてもらえないこともなく、家族が

確かめることもなく行き倒れて息絶えた方たちである。原爆は、一瞬の閃光で衣類も皮膚も溶かし、凄まじい死に方をさせた。また放射能で今でも苦しんでいる人がいる。さらに、原爆というものが分からないので、近くに行くとうつるから来ないでほしいと言われ、火傷のある人は差別をされた。医学的には何も解明されていない放射能を浴びたばかりに一生苦しまなくてはいけない。私たちは、核兵器を許すことはできない。

日本でも戦争を知らない人、原爆の被害を知らない人がたくさんいるので、本当は話したくないが、辛くて悲しい話をする。戦争の恐ろしさを知らなければまた戦争が起きてしまうので、皆さんに辛い話を知っていただき、戦争の加害者にも被害者にもなっていないのだということを知っていただきたい。今日の聞き手は明日の語り手である。皆さんが聞いたことは、語ってほしい。被爆者も歳をとったので、これから生きる方に、私たちは心から期待をしている。

学び、考え、伝えること

二年 石井 颯

僕は今日の話を通して、戦争の悲しさ、そして命の大切さを学び、考え、そして人へ伝えていくことが僕達にできることだと思いました。山田さんの話から、戦争、そして原爆によって、自分の大切な人、大切なもの、大切な場所、全てを壊された、戦争は、そういう恐ろしいものと分かりました。しかし、ただそれを「恐ろしい」で片付けてしまっただけはまた誰かが同じ過ちを繰り返してしまうかも知れません。だから、今日「聞き手」だった僕達が、次の「話し手」になることが大切だと思います。そのために、もっと戦争や命のことを知り、学ぶ必要があります。そして、考え、「自分の意見」を持つて互いの命を大切にし、尊重することがどれだけ大切なのか、「伝える」ことをしていきたいです。道徳の授業でも習ったように、被爆したことによって、今でも苦しい思いをされている方がいることを受け止め、もう絶対に繰り返してはいけない、そういう強い思いで伝えていけたら皆で互いの命を尊重できると思います。

だから僕は人権を、命を尊重し合え、過ちを繰り返さないために「学び、考え、伝えて」いきたいと感じました。

「平和の語り部」からのお話を聞いて

三年 楠 さくら

私は山田玲子さんの話を聞いて、あらためて戦争の恐ろしさ、悲しさ、そして「戦争は人々を幸福へと導くものではなく、不幸へと導くものである」と思いました。

暑い暑い夏の日一瞬のまぶしい光によって目の前が何も見えなくなり、次に視界が晴れた時には世界が変わっていた。それだけでもかなりの恐怖であるのに、「消えた八月」の歌詞にもあるように、人々の姿が変わっている。隣に住んでいた人、友人、家族、自分の知っている人が自分の知らない姿になっている。ものすごい恐怖だったと思います。

私は、小学校低学年のころ、帰省のため広島へ家族で行きました。その時私が、「原爆ドームに行きたい。」と言うと母が、

「原爆ドームや原爆資料博物館にそんな安易な気持ちで行きたいと言ってはダメ。行くなら行くかなりの覚悟を持ってからにしなさい。」としかられたのを覚えています。あの頃より大きくなり、いろんなことを学んだ今だからこそ、自分の発言がどんなに軽々しかったかわかるようになりました。

戦争のない時代に生まれ、自分の意見が言え、政治に参加する権利があたえられていることに感謝してこれからは生きていかなければ

ばならないのではないかと考えさせられる講演会でした。

本当の戦争のおそろしさ

一年 近藤 藍

私は今まで、原爆や戦争のおそろしさについてしっかりと理解していなかったことが、山田さんのお話を聞いて分かりました。

小学校の国語や総合の授業で、戦争や原爆の被害にあった人の本を読んだり、話を聞いたりすることがありましたが、その人の体験話を聞いたことが無かったので具体的に何が起り、どういう被害でどのくらいの人々が亡くなったのかは知りませんでした。今日、山田さんのお話から分かったことは二つあります。

一つは、子どもが大人に文句や意見を言っはけなかったという事です。今は、子どもはたくさん意見や不満を両親や先生などの周りの人に言うことができます。戦争中は、そのようなことも許されなかったのはとてもつらかったらうなと思いました。

二つ目は、亡くなっているとされている人々の半分は行方不明ということです。行方不明ということは、家族や知り合いがどうしているかも分からず、一人でさみしく亡くなったということです。たくさんの人々が戦争という国同士の争いに巻きこまれ、その多くが亡くなってしまうというだけでも、とてもむざんで悲しいことなのに、その半分が、誰にも会えず、亡くなった後も見つけてもらえずにいる人々というのは、本当にひさんで悲しく、戦争の一番の被

害者たちだと思えます。

山田さんのお話から、戦争の本当に悲しいところを学び、これからは戦争なんて絶対にしてはいけないと思いました。また、改めて命の重みについて考えることが出来ました。この経験は、私にとっても貴重なものでした。これからはこの経験を活かして、更に戦争や原爆のおそろしさを学んでいきたいと思えます。





第二部 參考資料



## 平和パネル貸出のご案内

中野区では、区民の自主的な活動による平和事業を支援するため、所有する平和関連のパネル等資料について、中野区平和事業関連資料貸出要綱に基づき、区民団体等を対象に写真・パネル等の貸出しを行っています。

お問合せ：平和・国際化担当（3228）8987

○貸出パネル

|   | パネル内容・サイズ  | 点数   | 制作・発行等              |
|---|--|------|---------------------|
| 1 | アートによる世界人権宣言ポスター展<br>(Aタイプ、縦型、縦 73.5 cm × 横 52.2 cm) | 22 点 | アムネスティ・インターナショナル    |
| 2 | 原爆と人間展<br>(Bタイプ、縦型、縦 73 cm × 横 52 cm)                | 40 点 | 日本被団協               |
| 3 | 米軍沖縄上陸時の写真<br>(Cタイプ、ほぼ横型、縦 55 cm × 横 45 cm)          | 36 点 | 沖縄読谷村よりネガの資料提供により複製 |
| 4 | 原子爆弾 広島・長崎の記録<br>(Aタイプ、縦 60 cm × 横 42.7 cm)          | 30 点 | 平和博物館をつくる会          |
| 5 | 広島・長崎被爆写真<br>(Dタイプ、ほぼ横型、縦 42 cm × 横 59.5 cm)         | 52 点 | 原水爆禁止日本協議会          |
| 6 | 東京大空襲の記録写真<br>(Bタイプ、ほぼ横型、縦 30.5 cm × 横 42.6 cm)      | 25 点 | 東京都教職員組合            |
| 7 | 中野の空襲記録写真<br>(Bタイプ、ほぼ横型、縦 44 cm × 横 55 cm)           | 25 点 | 広報課資料より複製           |
| 8 | 中野の学童疎開記録写真  | 27 点 | 広報課資料より複製           |
| 9 | 世界反核平和ポスター   | 35 点 |                     |

Aタイプ イレパネ（解説は別に有り）  
 Bタイプ イレパネ（解説つき）  
 Cタイプ のりパネ（解説は別に有り）  
 Dタイプ のりパネ（解説つき）

○貸出対象団体

- 公益的事業を行う区民団体（区内に活動の拠点があり、その構成員の半数以上が区民であること。）
- 区内の官公署その他の公共団体又はこれらに準ずる公共的団体
- 区内の事業所若しくは商工業者又はこれらのものが組織する団体

○貸出対象事業

広く区民を対象とする事業であつて、中野区の平和行政の基本に関する条例の目的に合致するものであること。  
ただし、次に該当するものは除く。

- 事業の目的が主として宗教活動、政治活動又は営利活動であると認められるもの
- 資料の閲覧の対価として入場料、会費等を徴収するもの

○貸出手続

貸出を希望する団体は、平和・国際化担当の窓口にて「平和事業関連資料借用申請書兼借用書」を記入のうえ、下記の書類を添付し、提出する。  
審査終了後、貸出を行う。

- 平和事業の計画書又は趣意書
- 平和事業に係る収支予算書（入場料等を徴収する場合に限る。）
- 団体の規約又は会則（法人格を有しない団体の場合に限る。）
- その他、団体及び平和事業の内容等を判断するために必要と認められる資料

○貸出期間

貸出日から起算して原則として十五日以内

平和関連書籍等のご案内

平和の尊さを伝えるため、中野区では、戦時中の悲惨な真実を語り継ぐ資料（書籍・パンフレット・ビデオ）を作成しています。

※作成した資料は、区立図書館または政策室平和・国際化担当で閲覧・貸出を行っています。また、中野区ホームページで公開している資料もあります。

※所蔵先は、タイトルにある記号で表示します。★：図書館所蔵／◎：平和・国際化担当

お問い合わせ：中央図書館（5340）5070／平和・国際化担当（3228）8987

| タイトル   | 内容   |
|--|--|
| <p>★◎中野の戦災記録写真集（書籍）</p> <p>※区ホームページで公開中</p>                                    | <p>長く苦しかった戦争の間を懸命に生きた人々や、敗戦後何もかも失ってがれきの中から立ち上がった人々の姿等、当手を如実にもの語る貴重な写真記録集。（一九八五（昭和六十）年発行）</p>   |
| <p>★◎平和への祈りを次代へ</p> <p>中野区民戦争体験記録集1～3集（書籍）</p> <p>※区ホームページで公開予定（平成二十八年三月頃）</p> | <p>区民による戦争体験記。</p> <p>1集 従軍体験 22編、銃後の生活体験 21編、空襲 13編、終戦前夜 10編<br/>                 2集 従軍体験 11編、銃後の生活体験 15編、空襲 15編、終戦前夜 12編<br/>                 3集 広島・長崎原爆記録 19編、被爆を語り継ぐ―聞き書きボランティア活動記録― 9編、広島ノート―被爆者広島平和の旅の記録― 5編<br/>                 （一九九三（平成五）年～一九九五（平成七）年まで年一回発行）</p> |
| <p>★グラフなかの 14号</p> <p>ふたたび戦争は・・・区民の戦争体験集（書籍）</p>                               | <p>多くの区民の戦時中の体験談や記録写真、なお残る戦争の傷痕を記録したグラフィア、当時の中野区の動き等を掲載。（一九八二（昭和五十七）年発行）</p>   |
| <p>★グラフなかの 34号</p> <p>非核・平和を求めて（書籍）</p>  | <p>「憲法擁護・非核都市の宣言」五周年を記念して発行。若者の平和ポスター作成過程の記録、区内青年への平和に関する路上アンケートの結果、平和レポートの旅参加者への密着取材等を掲載。（一九八七（昭和六十二）年発行）</p>   |

|  |  |
|--|--|
| <p>★◎中野区ビデオ広報特集号<br/>平和への旅（ビデオ）</p>                        | <p>一九九〇（平成二二）年に実施された女性と平和―広島への旅―の記録。外国人二名を含む十名の参加者の、事前学習から旅行中、又、帰郷後における真摯な活動を伝える作品。（一九九〇（平成二二）年 読売映画社制作）</p> |
| <p>★◎中野区ビデオ広報特集号<br/>戦争のなかのこどもたち―ある国民学校の集団疎開―（ビデオ）</p>     | <p>野方国民学校（現野方小学校）の教諭によって当時撮影された集団疎開を中心とした戦時中の子供たちの様子をビデオ化した作品。（一九九一（平成三三）年制作）</p>                            |
| <p>★◎中野区広報番組「わがまちなかの」戦後50年（ビデオ）</p>                        | <p>戦後五十年を記念して制作。学童疎開や広島で被爆を体験した区民の体験談や区の平和行政のあゆみをまとめた作品。（一九九五（平成七）年十二月放映）</p>                                |
| <p>★◎中野区広報番組「わがまちなかの」平和への祈りを次代へ―戦争体験者の証言―（ビデオ）</p>         | <p>戦時中、学童疎開の引率や、中野区での戦災、広島での被爆等の貴重な体験を持つ区民の証言をまとめた作品。（一九九六（平成八）年八月放映）</p>                                    |
| <p>★◎わたしたちの街にも戦争があった―憲法擁護・非核都市の宣言<sup>15</sup>周年―（ビデオ）</p> | <p>「憲法擁護・非核都市の宣言」十五周年を記念して制作。谷戸小学校の子どもたちが戦争について学ぶため、中野の戦災体験を持つ区民から体験談を聞いた作品。（一九九六（平成八）年八月放映）</p>             |
| <p>★◎21世紀を平和の世紀へ（ビデオ）</p>                                  | <p>平和について考えるさまざまな区の催しに参加した区民に、「平和とは何か」をインタビューし、まとめた作品。（一九九九年十月放映）</p>  |

## 憲法擁護・非核都市の宣言

まちには こどもの笑顔がある  
ひろばには 若者の歌がある  
ここには 私たちのくらしがある

海を越えた かなたにも  
同じ人間の くらしがある

いま 地球をおおう 核兵器は  
あらゆる いのちの営みを  
この しあわせを 奪い去る

私たちの憲法は  
くらしを守り 自由を守り  
恒久の平和を誓う

私たちは この憲法を大切にし  
世界中の人びとと 手をつなぎ  
核をもつ すべての国に  
核兵器をすてよ と 訴える

この区民の声を  
憲法擁護・非核都市 中野区の  
宣言とする

昭和五十七年八月十五日

中野区

## 平和行政の基本に関する条例

中野区における平和行政の基本に関する条例  
(平成二年四月一日 条例第二十四号)

### (目的)

第一条 この条例は、中野区の平和行政に係る基本原則並びに平和に関する事業の推進及びその財源の確保について定め、もって区民の平和で豊かな生活の維持向上に資することを目的とする。

### (基本原則)

第二条 中野区は、世界の平和を求める区民の意志を表明した憲法擁護・非核都市の宣言(別記)の精神に基づき、日本国憲法の基本理念である恒久平和の実現に努めるとともに、区民が平和で安全な環境のもとに、人間としての基本的な権利と豊かな生活を追及できるよう、平和行政を推進するものとする。

### (平和事業の推進)

第三条 中野区は、平和行政を推進するため、次の事業(以下「平和事業」という。)を実施するものとする。

- 一 日本国憲法に規定する平和の意義の普及
- 二 平和に関する情報の収集及び提供
- 三 国内及び国外の諸都市との平和に関する交流
- 四 その他、この条例の趣旨に基づき区長が必要と認める事業

### (基金の設置)

第四条 平和事業に要する財源を確保するため、中野区平和基金(以下「基金」という。)を設置する。

### (基金の額)

第五条 基金の基本額は、一〇〇、〇〇〇、〇〇〇円とする。

### (基金の管理)

第六条 基金に属する現金は、金融機関への預金その他最も

確實かつ有利な方法により保管しなければならない。

二 基金に属する現金は、必要に応じ、最も確實かつ有利な有価証券に代えることができる。

(運用益金の処理)

第七条 基金の運用から生ずる収益は、一般会計の歳入歳出予算に計上して、基金に繰り入れるものとする。

二 区長は、前項の規定により基金に繰り入れた額の全部又は一部を平和事業に要する経費の財源に充てるため、処分することができる。

(繰替運用)

第八条 区長は、財政上必要があると認めるときは、確實な繰戻しの方法、期間及び利率を定め、基金に属する現金を歳計現金に繰り替えて運用することができる。

(処分)

第九条 区長は、第七条第二項の規定によるほか、平和事業を実施するための財源に充てる場合に限り、基金の全部又は一部を処分することができる。

(平和事業の公表)

第十条 区長は、平和事業の内容及びそれに要した経費並びに基金の運用状況を、毎年、区民に公表しなければならない。

(委任)

第十一条 この条例の施行に関し必要な事項は、別に区長が定める。

附 則

この条例は、公布の日から施行する。

附 則 (平成十五年十二月十六日条例第四十六号)

この条例は、平成十六年四月一日から施行する。

別記

憲法擁護・非核都市の宣言

まちには こどもの笑顔がある

ひろばには 若者の歌がある

ここには 私たちのくらしがある

海を越えた かなたにも

同じ人間の くらしがある

いま 地球をおおう 核兵器は

あらゆる いのちの営みを

この しあわせを 奪い去る

私たちの憲法は

くらしを守り 自由を守り

恒久の平和を誓う

私たちは この憲法を大切にし

世界中の人びとと 手をつなぎ

核をもつ すべての国に

核兵器をすてよ と 訴える

この区民の声を

憲法擁護・非核都市 中野区の

宣言とする

昭和五十七年八月十五日

中野区



平成27年度「平和の語り部」派遣事業感想文集

2016（平成28）年2月発行  
（27中政企第1551号）

編集・発行 中野区政策室企画分野  
住所 中野区中野四丁目8番1号  
電話 03（3228）8987  
E-mail [kikaku@city.tokyo-nakano.lg.jp](mailto:kikaku@city.tokyo-nakano.lg.jp)